あなたを信じて・・・

優璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたを信じて・・・

【Ｎコード】
Ｎ９４８２Ｇ

【作者名】
優璃

【あらすじ】
浪人生活が終わり、やっと大学生になれたゆいは、あこがれだった１人暮らしを始める。そこで思いがけない出会いをすることになり・・・本当のことを隠しているゆいと、どこか、おかしい優雅。普通のカップルにはありえない！恋ってなんなの？？一目惚れってそんなものなの？？２人はどうなってしまうのか！？

第1話：思いがけない出会い

４月から大学生♪ゆいは新生活に期待と少しの不安を持って、九州から、遠く離れた神奈川まで引っ越してきた。
田中ゆい　１９歳。苦しい浪人生活から開放されて、憧れていた一人暮らしが始まる。

「えっ！？ここがマンション！？」心配性で完ぺき主義の父が選んだマンションは、予想以上に立派で、可愛らしいところだった。　　引っ越してきて1週間くらいは、荷物の整理や新しく届く家電や家具のことで忙しかった。『よし！あとはテーブルとチェストが来るだけ♪』大学も始まり、部屋も一通り片付いてひと段落。大学の同じ学年の子は殆どが現役で入学してきてるから、殆どが私より年下ｗ友達になれるか、どう接していいのか、不安だったけど、入学してみればそんなことは全く気にならなかった。
８日に届く予定だったテーブルとチェストは、１２日に日延べとなった。

そして１２日・・・
実家にいた頃は早起きが苦手だった私が、引っ越してきてからはなぜか朝ちゃんと起きれるようになっていた。
その日は朝１１時くらいにテーブルとチェストが届くことになっていたから、朝７時半には起きた。
・・・『ピンポーン』　　えっ？？今何時！？と思い時計を見ると、１１時。
えぇーーー　寝ちゃってた！！まだ着替えてもないし、髪も整えて

ないー・・でも待たせるわけにはいかないから、とりあえずインターホンに出て、部屋に来るまでの間に着替えて、髪を整えた。・・・・せっかく早起きしてたのに～意味無いじゃん！でも3階でよかった～

『ピンポーン』　あ！来ちゃった。ドアを開けると・・・　『！！！　超若いし結構カッコいいかも・・こんなときに限って・・化粧もしてないよ～』

「じゃぁ、これを読んでてください。」

『お客様へ』と印刷さたその紙には、『本日は　辻野　が担当させていただきます。』と。『辻野さんっていうんだ～』

「じゃぁ、チェストはどこに置きます？」

思いがけない展開に内心ドキドキしていた私をよそに、辻野さんは笑顔で訊いてきた。

「あ、・・ここしかないですよね？w」

「そぅですねw」

わかってましたけど、一応ききました。みたいなww

「テレビがあるんで、この辺でいいですか？」

「あっ、テレビは上にのらないですか？」

ちょっと頑張って訊いてみた。

「ん～のらないですね～」

「ですよねww」

やっぱり無理かぁ。重いしね。仕方ない。

辻野さんは慣れた手つきでチェストを組み立て、もうテーブルに取り掛かっている。

「大学は白大ですか？」

「いぇ、浅見大学です。」

白大といえば有名大学だ。ここから割と近いけど、私には手の届かない大学だ。浅見もそこそこのレベルはあるんだけど・・

「浅見？どの変ですか？」

知らないんだ～　ちょっとがっかり。

「すぐそこです♪」
「へ～近いんですねw」

辻野さんは会話が上手で、結構色んなことを話した。辻野さんは今22歳で、来年の3月に23になるらしい。私は1浪したから、今年ハタチになることをいうと、
「3つしたかぁ・・・」
と。何を思っているんだろう??
そして・・
「彼氏とかはいるの?」
えっ!?・・・
「いませんw」
「ほんとに??絶対いそうだけど」
「ほんとですw」
・・・本当は・・ほんとじゃない。私の悪いくせだ。友達とかに、『彼氏いるの?』って訊かれるといつも『いないよ～ww』ってこたえちゃう。
知られたくないわけじゃないんだけど、・・・なんでなんだろう?
でも、ほんとにその彼氏のことが好きだったら、ちゃんと、『います♪』ってこたえるんじゃないかな～って思う。

第1話：思いがけない出会い（後書き）

この作品を読んでくださってありがとうございます。初めての作品なので、まだまだ未熟ですが、応援していただけたら幸いです。投稿が少しおくれることもあるかもしれませんが、できるだけ早めに投稿します。よかったら、次話もよんでみてください♪今後とも、宜しくお願いします。

第2話：本当は・・・

涼とはチャットで知合った。今の私の彼氏だ・・。
受験勉強の息抜きにやっていたチャット。涼も1浪したらしく、『浪人の辛さはわかる。』と言って、私を支えてくれた。
早瀬　涼。涼は東京に住んでいて、私より7つ年上。お互い相手の顔も知らないまま、なんとなく、付き合っているということになっていた。涼に初めて会ったのは、私が神奈川に来てから。
正直・・私のタイプではない。
会う前からそんな気はしていた。
ただ、ものすごく優しい人。私をほんとに大切にしてくれてる。
だから、私も涼を好きになろうって思った。そぉ決めたのに・・そんな時に、私は優雅に出会ってしまった。
涼はほんとに優しいし、私を大切に思ってくれてる。
でも・・私を見てくれていない気がする。なんて表現したらいいのかわからないけど、涼は私自身じゃなくて、私という存在を大切に思ってる。つまり、私じゃなくて、誰でもいいんじゃないかな？って思う。
私のマンションに来ると、即行テレビをつけ、私と話をするわけでもなく、テレビを見ている。
寝るときになると、からだを求めてきて・・　なんか、そのために私のマンションに泊まりに来てる気がして・・

実は・・今朝も、涼は私のマンションから出勤していった。
涼が部屋を出た後、私はいつの間にか寝てしまっていて、気づいたら家具がくる時間になっていたというわけ。

涼はもう27歳だし、そろそろ結婚を考えていい歳だ。
涼は、私と結婚することを前提に付き合っている。まだ出会って半

年も経ってないし、実際に会ってからはまだ1ヶ月も経ってない。
それに私はまだ２０歳にもなってない。大学生になったばかりの私に、結婚なんてまだ全然わからない。
でも涼はそんな私はお構いなしだ。『大学卒業するまで待ってるから。』なんて言ってる。
束縛もかなり強い。私がサークルに入るのでさえ、『出来れば入らないで欲しい』と言われた。
でも私は、大学生になったらサークルに入るって決めてたから、そこは譲らなかった。

束縛が強いのは、それだけ愛されてるってことだって思う。でも・・涼は気づいていないんだろうけど、涼が愛してるのは私自身じゃなくて、私という存在。彼女という存在を愛してるんだ。
そんな涼を、私はやっぱり本気で、心から好きになることは出来なかった。
ほんとに優しくて、一生懸命でいい人なんだけど・・涼と一緒にいてドキドキすることもないし、なんか彼氏っていうよりは、お兄ちゃんみたいな存在。
だから、辻野さんに『彼氏いるの？』って訊かれたとき、『いません。』って言っちゃったんだと思う。
ほんとに好きな人だったら、いない　なんて言わないよ。

なんか・・私最低な女だよね・・

第2話：本当は・・・（後書き）

第一話、読んでくださってありがとうございます。アクセス数が思った以上にあり、驚いています。第二話、投稿遅くなってすみません。なかなか話がまとまらなくて、読んでて「ん??」と思うところもあるかもしれませんが、まだまだ未熟者ですのでご了承ください。読者の皆さんから何かアドバイスやご意見などありましたら、どんどん評価・感想として送ってください！お待ちしてます♪

第3話：優雅

「あの、こちらはお客様で組み立てになるんですけど、よろしいですか？」
テーブルとチェストの組み立てと設置を終えた辻野さんは、残りの収納ボックスを置きながら言った。
「はい。多分大丈夫だと思いますw」
「多分？wドライバーとかありますか？」
「はい♪ドライバーとネジで組み立てればいいんですよね？」
「そぉですねwwそんな難しくないんで、大丈夫だと思いますw」
「多分大丈夫ですw」
「はぃwwもし組み立てられなかったら来ますんでw」
ん？今なん　て？？・・・

さっき辻野さんが言ったことが気になってる私をよそに、辻野さんはテレビの方を見て、
「やっぱり乗せてみましょっかw乗せたいですよねww」
「えっ？あっw　乗りますか？」
「ん～　乗りましたねw」
「乗せても大丈夫な感じですか？」辻野さんはチェストをコンコンとたたきながら、
「大丈夫ですねw」
「wありがとうございます♪」
優しいひとだな～♪電気屋さんも、ガス屋さんも、皆いい人ばっかりだったし、ほんとによかった～♪
「じゃぁ、キズなんかがないか、チェックをお願いします。」
「はぃw多分大丈夫ですよねww」
一応軽くチェックして私は言った。
「そぉですねww　俺を信じない方がいいですよww」

「え？？」
「冗談です。俺は優しいからｗｗ　天然だねってよく言われない？ｗ」
「え？ん～　言われなくもないかも？」
「ｗｗｗかわいいね～ｗ」
なんか辻野さんは凄く楽しんでいるように見えた。私も、なんか楽しかった。

「じゃぁ、これで終了です。」
「はぃｗありがとうございました。」
もぅ終りかぁ・・　辻野さんを玄関まで見送っていくと、
「ほんとに彼氏いないの？？」
「はぃｗｗ」
涼・・ごめんね・・
「へ～　そっか♪　じゃぁ、今度遊びましょぅｗ」
「はぃｗｗ」
「ほんとに？？」
「はぃｗ」

「お～じゃぁ、番号教えてｗ」
「携帯のですか？」
携帯以外に何があるんだｗと言ってから気づいた。それだけ頭の中がてんぱってたんだと思うｗ
「ゆいちゃん　で登録しとくねｗ」
「え？」
「あれ？田中ゆい　ちゃんだよね？」
「あっｗはぃｗｗ」
すごい。いつもお客さんのとこに配達に行くときはフルネームで覚えてるのかな？
「俺は　ゆうがｗ」

「ゆうが??」
「うん。優しいに、・・ちょっと紙ww」
私漢字が苦手なんだった～＞＜　ごめんなさい＞＜
『雅』
「これです♪」
「あっ！はぃw　辻野優雅さんですねw」
「そぉそぉw」
「金曜とか学校終ってから大丈夫ですか？」
え？もうそんな具体的に決めるの??
「あ～金曜はサークルがあるので・・」
「じゃぁ、サークル終ってからww」
「それはちょっと遅くなるから・・」
「www　じゃぁまた連絡しますw」
「はぃw」
「夜道には気をつけてw」
「はぃw」
「じゃぁ、失礼しましたw」
「ありがとうございました♪」・・・バタン。

ごめんね・・涼・・・　涼への罪悪感でいっぱいだったけど、辻野さんと出会えたことは嬉しかった。辻野優雅　優しいっていう字入ってるんだ～　ほんとに優しい人だった♪

収納ボックス・・組み立ててみよw
そんなに難しくはないと思うんだけど、私が思っていたよりは難しくて、結構時間がかかった。

でもまぁ、とりあえずは1つ完成♪これでいいんだよね？・・
もう1つは・・今のとこどこに置いていいかわかんないし、もう少
しして、置き場所が決まったら組み立てよっ♪
どれくらい時間が経っていたのか・・収納ボックスを1つ組み立て
て、軽く掃除をし終わった頃・・

♪～♪♪～～
携帯がなってる！！電話！？
『辻野優雅』
・・・えっ！？ん？なに？？

「もしもし～？」
「あw俺ww　わかる？？w」
「はぃwwわかりますよw」
「wよかった。組み立ててみた？？」
あぁ～w心配してかけてきてくれたんだ♪優しいな～♪
「はぃw1つだけw」
「出来たんだww心配で、かけてみただけww」
「そっか～ww」
「じゃぁ～・・また連絡するねw」
「はぃw」

仕事中じゃなかったのかな？w
でもビックリした～～wwまさかこんなにすぐかかってくるなんて
思ってなかったw
でも、もし私が組み立てきれてなかったら、ほんとに来てくれるっ
もりだったのかな？　じゃ無かったらわざわざ電話してこないよね？
『辻野優雅』　・・私の心は、もうすでに彼に傾きかけていた・・

第3話：優雅（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。こんな出会いありえない！って思ってる方もいますよねｗｗでもありえちゃうんですよね～ｗｗ最終話（まだまだ先の話になると思いますが・・）まで読んでくだされば、わかっていただけるかと思いますｗありえない！！ようなことは、まだまだ始まったばかりですｗ次話以降、女性の方なら、ゆいの気持ちをよくわかって頂けるかと思います。男性の方、女の子はこう思ってるんですｗ　第４話も、読んでいただけたら幸いです♪

第４話：直感

♪♪～～♪～

ん・・もぅ朝かぁ～

！！！待って！今何時！？

８：００　おぉｗよかった～ｗｗ

１人暮らしを始めてから、私が一番恐れているのは寝坊だｗｗ

親と一緒に暮らしてた時は時間ギリギリになると、おかぁさんが起こしに来てくれてたけど、今は当然起こしてくれる人なんていない。

ただでさえ朝が非常に弱いのに、時間がやばくなっても起こしてくれる人がいないとなると、私的には大問題だ。

だから、毎晩寝る時は朝起きれるか不安で仕方ないし、毎朝目覚めた時は寝坊したんじゃないかと焦って時計を見る。

この光景を他の誰かが見ていたら、きっとおかしくて笑ってしまうだろう。

朝が強い人にはこの気持ちはわからないだろうケド、朝が弱くてかつ、１人暮らしをしている人ならよ～くわかってもらえると思うｗｗ

とにかく毎朝必死ｗｗ

今日も何とか起きれて一安心ｗｗ

今日からまた学校かぁ～ｗ

ん？？携帯が光ってる？しかも電話？？

７：３０に着信があってる！！

そんな早い時間に誰だろう？

・・『辻野優雅』

え？優雅さん？なんだったのかな？

とりあえず、学校に行く準備しよｗｗ

電話は後でかけなおそぅｗ

プルルルル・・・
「もしも～し」
「あwおはようございますw」
「おはょぅw」
「電話しましたか？」
「あwうんw別に用があったわけじゃないw」
「そぉなんですかww」
「うんww　今日学校何時から？」
「9時からです。」
「もうすぐじゃんww」
「はぃw今行ってるとこですww」
「走んなくていいの？w」
「まだあと10分以上あるから大丈夫w」
「そっかwww　じゃぁ、また連絡するねw」
「はぃww」
「授業頑張ってねw」
「はぃw」
「じゃぁまたねw」
「はーぃw」

用はないけど電話ってww
しかも昨日会ったばっかりで、翌日www
優雅さんは私のことをどぅ思ってるのかな？
普通はお客さんとプライベートで連絡取ったりしないよね？
それとも・・優雅さんはそぉいう人なのかな？

私の他にも、番号聞いて連絡とってる人がいるのかな・・
でも、そんな人には見えなかった。
直感。私の直感は結構そのとうりだったりするｗｗ
テストとか、勉強面では全くだけど、人間関係での直感はなかなか当たる。
なんて言うのかな～？人の心が読める？みたいな？
なんかそんなに大したことではなくて、ホントに直感的な感じなんだけど、なんとなく、その人がどんな気持ちなのかがわかる。
勿論、今すれ違った人はどんな気持ちだったかなんて聞かれてもわからないよｗその場の状況を理解した上での話しだけど。
ただ・・この直感を使えるのは、私が第３者として物事を見てるとき。
つまり、そこに私の感情が入ってしまうと、直感もなにも、ホントに何にもわからなくなる。
特に、そこに恋愛感情があればなおさら。
今の私は、優雅さんのことを冷静になって見る事が出来ているのか・・

第４話：直感（後書き）

第４話まで読んでいただき、ありがとうございます♪投稿おそくなってごめんなさい＞＜　”直感”・・魔法とか超能力とかではなくて、ほんとになんとなく感じるんですよね～ｗわかっちゃうのが辛いときもあったり・・知らない方が幸せなことだってありますよねｗ今後も直感で優雅を見ていこうとするゆいですが・・もうすでに感情が入っちゃってるんですよねｗｗ優雅の考えてることがますわからなくなるゆいですｗ　次話もお楽しみにｗ

第5話：優雅との約束

４月１４日・・・今日で涼と付き合って４ヶ月・・２人で決めた記念日。
なんとなくいつのまにか付き合うみたいな感じになってたから、正確な記念日が無かった。
４ヶ月かぁ・・・私は何をしてるんだ・・
優雅に会ったあの日から、私は葛藤の毎日だ。涼とメールするだけで、罪悪感を感じる。優雅に・・・　なんで涼じゃなくて優雅に罪悪感を感じてるんだろう・・
嘘をついたから？・・・それもあるけど・・
もう私の心は優雅でいっぱいだった。
優雅が私をどう思ってるのかはわからない。でも、私さえ心を開けば、優雅と私はただの配達の人とお客の関係ではなくなるだろう。
ただのお友達の関係ではなくなるだろう。
それくらいは私にだってわかる。
直感だけど・・・
じゃぁ涼は？どうするの？・・・
いままで私を支えてくれた、私のことをホントに大切に思ってくれてる涼に簡単に別れを言えるわけがない。
私にはそんなことできない・・

そんなことを思っていると、もう４月も今日で終わりだ。

ん？着信？誰だろう？
優雅・・英語の授業までまだ時間あるし、かけなおしてみよ♪

「もしもーし」
「あw電話しましたか？」
「うん。今学校？」
「はぃw」
「今授業大丈夫なの？？」
「はぃ。今は休み時間です♪」
「そっかwゴールデンウイークはいつから休みなの？」
「2日から6日までです♪」
「いいねぇw」
「お休み無いんですか？」
「うん。忙しい時期だからねw」
「そっか～　大変＞＜」
「ゴールデンウイークは何か予定あるの？」
「2日と4日は友達と遊ぶ予定です♪」
「へぇ～　じゃぁ3日は空いてる？」
「はぃ♪今のところはw」
「じゃぁ、3日に一緒にご飯食べに行こぅ？」
「はぃwいいですよ♪」
「じゃぁ約束ねw　仕事終ってからだから8時くらいになるかも。」
「はぃw」
「じゃぁまた連絡する。」
「はーぃw」
「またね～w」
「はーぃw」

・・・すんなり約束してしまった・・
しかも夜・・
私はどぅなっちゃうんだろぅ・・

いろんな事を考えた。
ご飯を食べて、それだけで終わりなのかな？
もしかしたら、初めから体目当てだったら・・家に帰って来れなかったらどぉしよぅ・・
でも、どこかで大丈夫だと思ってた。直感だけど、優雅はそんな人じゃないって思えてた。
もぅ約束しちゃったし、なるようになるさ。

5月2日。
優雅との約束の日の1日前は、涼とデートの約束をしていた。
優雅には友達って言ったけど・・実は涼。
明日他の男の人と約束してることなんて何も知らない涼。
罪悪感でいっぱいだった。
涼にも優雅にも。
その日の夜も、涼は当然体を求めてきた。
私は涼と愛し合った。今までにないくらい。
ただ・・最後まではどうしてもできなかった。
怖いし、受け入れられなかった。きっと、ホントにホントに愛してる人じゃなきゃだめなんだと思う。
明日、私はどうなってるかわからない。
無理やりホテルに連れ込まれるかもしれない。優雅はそんな人じゃないって思ってても、それくらいの覚悟はしてた。
だから、もしかしたら今日が最後になるかもしれないから、
今日は涼と愛し合った。

ピピーッ　ピピーッ
ん・・朝かぁ。
隣では涼がぐっすり眠ってる。
「涼～　もぅ起きなきゃだよ～」

涼は今日は仕事だ。
仕事じゃなかったら優雅と会う約束なんて出来ない。
涼は仕事がない日はいつも私の家に来てるから。

涼を見送って、すぐに部屋の掃除に取り掛かった。
散らかっていたわけではないんだけど、
もしかしたら、優雅が今夜ここに来るかもしれないし、どうなるかわからない。
それに・・涼のいた形跡がないようにしなきゃ・・
涼の荷物は全てダンボールに入れて、収納庫にしまった。

誰がどう見ても、男の人が出入りしてるとは思えない部屋になった。

私って最低だ・・
涼の荷物が何一つ置かれていない部屋を見てそぉ思った。
掃除はやりだすときりが無く、かなり時間がかかった。
布団も選択した。

手は抜かない。
私は証拠隠滅（言い方は悪いけど・・）には自信がある。
多分器用なんだと思う。ものすごく。

そうこうしてるうちに、もう夕方になっていた。

もぅ完璧かな・・
他には～あ、炊飯器拭いとこw

♪～♪♪～～♪～
あ　優雅・・

「もしもし？」
「あ、オレw」
「はぃww」
「何してたの？」
「今炊飯器拭いてましたww」
「そっかw今仕事終ったから、今から行く。何か食べたいものある？」
「ん～～なんでもいいですw」
この言葉をいわれるのが一番困るんだよね・・　わかってるんだけど、これしか言えない・・
もし、相手がそれは嫌だったら・・って考えちゃう。
「何かないの？wちょっと考えててw」
「はぃw」・・きっと考えつかないよ・・
「今から行くから、８時くらいになるかな。ごめんね？」
「大丈夫ですw」
「じゃぁ、待っててw」
「はぃw」
「近くになったらまた電話する。」
「はーぃw」

なんか緊張してきた・・
８時かぁ・・
でも何食べたいか考えててって言ってたし、きっと大丈夫。
今の電話で、優雅は大丈夫だとどこかで確信した。直感だけど・・
ただ・・この確信はあまりに強すぎた・・・

第5話：優雅との約束（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。　投稿遅くなってごめんなさい。　私も夏休みになったので、次話は少し早めに投稿できたらと思ってます♪　少し涼しくはなってきましたが、まだ夏ですw　夏バテ、インフルエンザに気をつけてくださいねw

第6話：初デート？（前書き）

投稿おそくなってごめんなさい。。こんな作品を待っていてくださった方がいらっしゃったら、幸いです。

第6話：初デート？

♪～♪♪～♪～

「もしもし？」

「多分着いたw」

「え？もぅ着いてるんですか？」

「ぅんw多分ここでいいと思うw」

多分ってwww

「え　じゃぁどこに行けばいいですか？？」

「下に車停めてるよw」

「じゃぁ今から行きます」

はやいしwwてか、近くになったら電話するって言ってたのにー

もぅ着いてるとか・・

心の準備が・・

急いで階段を下りてマンションの共同玄関を出た。

下って・・　あ！きっとあれだ。

濃い紫色の大きめのその車に近づいて行くと、助手席側の窓が開いていて、

「乗ってw」

仕事着のままの、あの日と何も変わらない優雅だった。

「ここにいいんですか？」

一応聴いてみた。男の人の車の助手席って結構重要な席な気がする。

バイクの後ろの席と同じくらい。

男の人がバイクの後ろに乗せるのは、やっぱり彼女さんでしょ？

だから、私がここに乗っていいのかな～？って・・
でも優雅は当然だと言わんばかりに、
「うんw」
「おじゃまします。」
「おそくなってごめんね。着替えてきたかったんだけど、もっと遅くなっちゃうから。」
「そっかww」
緊張気味の私は、もう何を言っていいのかわからなかった。
「元気してた？」
「はぃw」
「ならよかったw」
「www」
「髪伸びたね。」
そぉ言いながら、優雅は私の頭をポンポンとなでてきた。
「そぉですか？前から長かったですよw」
いきなりの展開に、どうしていいかわからず、恥ずかしくて窓の外を見ながら答えた。「あれ？化粧してる？」
え！？こんなに暗いのにわかるの！？！？
「はぃw少しw」
「この間はしてなかったからw」
だってあの時は・・
「あ、あの時は直前に起きたから・・」
「ふ～んww」
化粧してるかとか結構見られてたんだ＞＜　でも、化粧してなかった私を誘ってくれてるんだから、悪い印象ではなかったってことかな？
むしろ、化粧してない私を知られてるのは気持ち的に楽だww
「どこ行こっか？」
「どこでもw」
「この辺でどこか食べるとこ知ってる？」

「知らないですw」
「あんまりないもんね～」
「はぃw」

「大学ってこっちの方？」
「あ、これが大学ですww」
「あ！ここ！？へぇ～」
会話がなかなか続かない・・・

「彼氏いないの？」
「いませんw」
この間と同じ質問www
「ホントに？？？」
「ホントですw」
「へー　そっかそっかw」
「オレのこと覚えてた？？」
「はぃwwちゃんと覚えてますよw」
「じゃぁ、俺の名前は？」
「辻野優雅さん・・」
私の声が少し小さくなった。
面と向かって名前を呼ぶのは初めてだもん。なんか恥ずかしい。
「そぉそぉw優雅wあれ？？上の名前教えたっけ？」
「あ、あの・・紙に書いてありました。」
「紙？・・あ～～あれかw」
私のあの説明でわかってくれたんだwww
「オレはちゃんとゆいちゃんのこと覚えてたよw」
いきなり名前を言われてビックリした。
「そぉなんですか？」
そんな私に、優雅はまだ続けた。
「ぅん。1日に何十人のお客さんのとこ行って話しするから結構忘

れてるんだけど、ゆいのことは覚えてた。何話したかまではあんま覚えてないけどw」
ゆいって・・言ったよね・・？
「あ、ゆいって言っちゃったwまぁいいかw」
なんか嬉しかった。男の人に下の名前で呼び捨てにされるのは好き♪
なんだろぅ？なんか、親しみみたいなのを感じるw

「実家どこだっけ？」
「福岡ですw」
「そっか～wてか、敬語じゃなくていいよwwなんか変な感じw」
「あwぅんwでも、敬語じゃないのもなんか変な感じw」
最後に私が言った言葉は優雅の耳には入ってなかったようだった。
沈黙になりそうだったから、今度は私から話題をふった。
「実家も神奈川？」
名前をどう呼んでいいのかわからない・・
「ぅん。田舎w田舎はいいよ～w」
「私の実家も田舎だよ？w」
「そぉなんだw　あ、ここにしょっか？w」
「ぅんw」
優雅が車を入れたのは、私がこの間この辺を散策したときに「アルバイト募集」の張り紙がしてあって、立ち止まったお店だった。

優雅は駐車場に慣れた感じで車を停めて、車を降りた。
携帯・・おきっぱだけどいいのかな？
とは思ったけど、言わなかった。
私といるときに携帯をさわって欲しくない。優雅だからじゃなくて、誰かといるときにその人を放っておいて携帯をさわるのは失礼だと思う。
だから、私は彼氏の前では特に重要なことじゃない限り、携帯は開

かないって決めてる。
もし、優雅がわかってて携帯を車においてきたのなら、凄くうれしい。
・・私独占欲強すぎ・・

お店に入って定員さんに案内され席に着いた。
「食べないの？」
メニューをあんまり見てない私に気づいた優雅が訊いてきた。
「食べるよw」
涼とどこかに食べに行くときはいつも涼と一緒に決めてたから、ついそのくせが出てしまった。
今一緒にいるのは涼じゃなくて優雅だ。自分の分は自分で決めなきゃなんだ。

・・・なかなか決まらない。値段もそれぞれで、いくら位のものにしたらいいのか・・優柔不断ってこぉいうときホントダメだなって思う。
ふと優雅のほうを見てみると、もう決まったみたいでこっちをみていた。
「優柔不断っていわれるでしょ？ｗｗｗ」
「ぅん・・」
「ゆっくり決めていいよw」
「ぅんw」

悩んだ末に私が頼んだのは　かに釜飯ｗ
うどんにしようかと思ったけど、初デートで麺類は良くないって聞いたことあってやめた。

注文を終えると、優雅はタバコを取り出した。
「吸っていい？」

「ぅん。」
お父さんがタバコを吸うから、そこまで気にしない。
けど、やっぱり健康には良くないから禁煙してほしいっては思う。
「ゆいが吸わないでって言ったらオレ吸わないよ？」
「ぅんw大丈夫w」
優雅の言葉は嬉しかったけど、今の私は優雅の彼女でも、仲のいい友達でもない。
まだ出会ってから会うのは2回目だ。
そんな私に、優雅に
「吸わないで」なんて言えない。

「辞められないんだよねw」
「そぉなの？」
「ぅんw16の時から吸ってる。悪い子でしょww」
「そっか～」
なんて言っていいのかわからなかった。
私の弟・・中3だけど、確か学校で吸ってるの見つかって色々言われてた・・
よく考えてみれば、私の周りの男にはタバコ吸う人ばっかりだ。
しかも未成年で・・
このままではいけないと思う。もぅ・・癌で大切な人を失いたくはない。

「兄弟いるの？」
タバコを吸い終えた優雅が話かけてきた。
「ぅんw弟が2人」

「へぇ～　弟いるんだw何歳？」
「一つ下と、今中学3年生w」
「いっこ下かぁ～　その弟も大学行くの？」
「あw今大学1年生w私1浪したからw」
「え？そぉなの？まいって馬鹿なの？w」
冗談半分にそぉ言う優雅。
「え？wぅんまぁそぉだね～w」
そこまで馬鹿ってわけじゃないけどwwてか、浪人したら馬鹿なのか？
「そっか～wwオレ大学行ってないからなぁw」
「そぉなの？」
「ぅんw高卒で働いてる。偉いでしょ？www」
「ぅんw」
「てかこのことこの間言わなかった？w」
「言ったかもw」
たしか・・大学行ってみたかったとか言ってたような・・
なんで高卒で働いたんだろう・・

第6話：初デート？（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます♪なかなか話が進まなくてごめんなさいm（＿＿）m　これからもこんな感じで続いていきます・・こんなスローな感じでよければ、次話からも宜しくお願いします♪

第7話：神様は残酷（前書き）

第6話で、優雅の苗字が、「辻野」→「小野」となってるとこがありました。すみません＞＜　さらに・・「ゆい」が「まい」となってるとこがありました＞＜本当にごめんなさい。今はちゃんと直してあります。以後、気をつけます！！！

第7話：神様は残酷

「現役の時はどこ受けたの？」
「沖縄ｗ」
「え！？沖縄！？じゃぁ、もしかしたらここにはいなかったかもしれないんだ。」
「ぅんｗ」
「そっか～　お盆は実家帰るの？」
「ぅんｗ」
「楽しみ？」
「ぅんｗ実家帰らないの？？」
またまた名前を呼び損ねた。なんて呼べばいいんだろ・・
「オレは実家ないから。」
「そぉなの？？」
・・・訊いてはいけないことを訊いてしまった・・どぉしよ・・・
こんな時、なんて言えばいいのかなぁ・・
「おばぁちゃんちには行くけどねｗ」
「そぉなの？」
そぉなの？しか言えない自分が情けない・・

まさか優雅にそんな事実があったなんて、思いもしなかった。

優雅は特に気にしていないような感じで話し出した。
「オレが小さい時に親離婚して、オレは父親と暮らすことになったんだけど、父親は早くに亡くなった。だから、オレはおばぁちゃんっ子なの。」
「そっか・・」
「オレにも妹がいたんだけど、妹は母親について行って、それからどぉなったかは知らない。」

「全然連絡とってないの？」
「ぅん。もう何年も連絡してない。」
「そぉなんだ・・」
「だから、ゆいが妹みたいですっげーかわいいｗｗ」
「そっかｗ」・・嬉しいけど・・・私は妹さんの代わりみたいな感じなのかな・・・
「おばぁちゃんとは一緒に暮らさないの？」
「ぅん。おばぁちゃんとは従兄弟が一緒に暮らしてるから。２８なのにプー太郎ｗだから、オレが頑張って働かなきゃ。」
「従兄弟は働かないの？」
「ぅん。オレ偉いでしょ？ｗｗｗ」
「ぅんｗ」
妹思いの優しいお兄ちゃんなんだろうなぁ・・
それにしても・・神様はどぉして優雅の人生をそのようにしてしまったのだろう・・
優雅は何も悪くないのに。親が離婚ってことだけでも、ものすごいショックなことなのに、その上これからも一緒に生活するはずだった、たった一人の家族だったお父さんまでなくしてしまって・・
優雅はどれだけ辛かっただろうか・・
ようやくわかった。優雅がどぉして大学に行かずに１８で社会に出たのか。
１８で社会に出て、一人暮らしをして、きっと、ほとんど誰にも頼ることなく今まで生活してきたんだ・・
私は自分が恥ずかしくなった。
１浪して、それなのに私大に通うことになり、おまけに一人暮らしで・・親にお金を使わせてばっかり。
世間的には、大学生の学費は親が負担して、一人暮らしなら仕送りもしてもらって　っていうのが普通なのかもしれない。大半の大学生はそぉだろう。
でも、優雅からしたらそれはものすごく恵まれてることで、親に甘

えてるように感じるんだろうな・・

そんなことを思ってると、注文した料理が運ばれてきた。
おぉ～　かに釜飯ｗ久々にちゃんとしたご飯食べたかもｗｗ
一人暮らしで一番大変なのは自炊だと思う。あれは辛いｗ特に今まで料理なんて殆どしてこなかった私にとっては辛すぎる。このままではいいお嫁さんになれないと思って今頑張ってるけど・・
なかなか上手くいかない。

「私食べるの遅いから、ゆっくり食べてねｗ」
「ゆっくりｗｗ食べるの遅いんだｗｗ」
「うんｗ」
「そぉだろうとは思ってたけどねｗ」
「そぉなの？ｗ」
「うんｗ」

「おいしい？ｗ」
「うんｗ」
「料理とかするの？」
「うん。一応・・」
「おぉ～　今度作ってよｗ」
「あ・・それはまだ・・」
「ｗｗだめ？ｗ」
「もうちょっと上達してからｗ」
「そっかｗｗ　でも、多分まだオレの方が上手いと思うよｗ」
「そぉなの？」
「うんｗ１８から一人暮らししてるからねｗ」
「そっか～ｗ」
「今度作ってあげるｗｗ」

「ぅんw」
「ぅん　ってwww」
あ・・なんか呆れられてる？・・・なんか自分が情けない・・・
料理も出来ない女なんて・・
頑張らなきゃ。

会話が全く無いわけではないけど、なかなか続かない・・
もともと話すのがあまり得意ではない私は、沈黙に耐えきれずただ、ひたすら食べていた。
優雅はちょくちょくこちらを窺ってるようだ。きっと優雅も何を話していいのか迷ってるのだろう。
私も優雅の様子を窺ってみる。
目が合ってしまった・・
「ん？w」
優しい目で優雅は私を見た。
「なんでもないw」
私は何を言っていいのかわからず、こう言ってすぐ目をそらしてしまう。
こういうのは慣れない。男の人と2人で食事とか、涼としかしたことがないんだもん・・

第7話：神様は残酷（後書き）

やっと投稿できました♪　優雅には実はそんな事実があったんですね～　ゆいは自分の恵まれている環境に甘えている自分が情けなく感じています。優雅と出会ったことで、ゆいは忘れかけていた大切な思いに気づきます。今後、ゆいがどのように成長していくのか。お楽しみに♪♪

第8話：優雅と涼の違い（前書き）

今回は早く投稿できました♪　投稿遅れてるのに、読んでくださってるみなさんに感謝してます♪

第8話：優雅と涼の違い

周りの人には私たちはどのように映っているのだろう・・
一見カップルのように思われるけど、それにしては会話がなさすぎる　というところだろう。
ホントに会話が弾まなかった。初めてあった日、優雅が仕事で私の部屋に家具を持って来た時の方が話が弾んでた。
あの時は、私はお客で、優雅は家具を持ってきたお兄さんで、もう二度と会うことなんてないって思ってた。
だけど・・私たちはおよそ1ヶ月後に再会した。
今の私は優雅を意識し過ぎている。知り合って間もない男の人と2人だけで会うなんて、私的には考えられない。
でも、今こうして実際に2人だけで会ってる。意識しちゃっうのも無理もない。
優雅はよくこぉいうことをしてるのかな・・・

私が無言で食べながら色んなことを考えてるうちに、気づいた時には優雅はもぅ食べ終わってるみたいだった。

「早いねw」
「そぉ？wゆっくりなほうだけどw　あ～お腹いっぱい。昔はもっと食べれたんだけどね～w」
「そぉなの？」
「ぅんw一食でご飯2合くらいは食べてた。」
「えぇ～　すごいねww」
こんなに痩せてるのにw
「食べきれる？」
「ぅんw大丈夫w」
私は最後の一杯をお茶碗に盛りながら笑顔で答えた。

「結構食べるんだねw」
「そぉ??」
えぇ～　だってこれで1人前じゃん！！
「女の人って、普通お茶碗1杯くらいしか食べないでしょ？w」
「ん～　でもお茶碗小さいしw」
普通完食するでしょ～
これくらいで結構食べるなんて言われたら・・実家での私を見たらなんて思われるんだろぅ・・・

「そぉ言えば、もう1つ組み立てた？」
何のことなのかすぐにわかった。あの棚のことを言ってるんだ。
「まだw一つだけw」
「組み立てないの？」
「ん～　まだ置く場所決めてないからw」
「そっかw」
なんでこんなことを訊いてきたのか、私にはなんとなく、優雅の考えてることがわかった気がした。
ホントに優雅の優しさもあったのかもしれない。でも、それだけではないような気がした。

優雅が食べ終わったことで余計に優雅の視線が気になり、平常を装うのが大変だった。私もやっと食べ終わり、お茶を飲んで、手を合わせて、
「ごちそうさまでした。」
一人の時は　ごちそうさまでした　は言わなくても、いただきます　は言ってる。
誰かと食事した時は、必ず「いただきます」と「ごちそうさまでした」
を言うのが身についてる。

特に、食べるのがおそい私にとっては「ごちそうさまでした」は重要だ。待っている相手に　もう食べ終わりました　って知らせることができる。おまけに、相手には『お行儀のいい子』と見てもらうことが出来る♪一石二鳥だw

あっ　お財布～　　おそらく優雅は私の分まで出してくれるつもりだろう。
でも、まだ知合って間もないし、そんなことをしてもらうわけにはいかない。
そぉ思ってお財布を取り出した。
けど・・
「あ　いいよw」
やっぱり・・
「なんで？？？」
予想はしてたけど、一応きいてみた。
「オレは社会人だからw」
「ん～・・　　ありがと・・」
こぉ言う時、私は素直にお言葉に甘えることにしてる。それが、相手に対して一番失礼ではないことなんだと思ってる。

優雅は2人分のお金を丁寧に渡し、レシートを受け取って定員さんに軽く頭を下げた。
涼との一番の違いだった。
お金や物や家族や人に対して、感謝の気持ちやありがたみを持ってる。
優雅のこの姿を見た時、私の中で優雅の存在はとても大きなものになった。
涼とお出かけして、いつも気になることが一つだけあった。それは、涼のお金や物や、自分の知り合い意外の人への態度だった。

お金を払う時も物の扱い方も雑で、全くありがたみが感じられないし、他人に対してはなんか冷たく、どこか攻撃的な感じだ。いつも、涼のそんな態度が気になっていた。そばにいて、気分が悪かった。

だから、優雅の態度はものすごく嬉しかった。この人は絶対に悪い人じゃない。
きれいな心を持ってる。

「おごちそうさまでした」
お店を出て、私は優雅にお礼を言った。

優雅の車に乗り、車はゆっくりと動き出した。

「これからどぅしよっか？」
・・・これから？・・・やっぱりご飯を食べてじゃぁ帰ろっか　ってはならないか・・
「いまからどっか行くにしてももぅ遅いしね・・　ゆいの家の近くでくっちゃべって帰ろっかw」
「ぅんw」

なんだか嬉しかった。優雅のとなりにいられることが。
涼の、お金や物や、他人に対する態度を見た時、私は涼のとなりにはいたくないって思う。他人のふりをしたくなる。
どんなに私には優しくしてくれて、私のことは大切に思ってくれてても、他の物や、お金や他人に対してありがたみや感謝の気持ちをもてない人は、どこか受け入れきれないところがある。
というか、そぉいう態度を見た時、一緒にいてイライラする。
今、となりにいる人が、もし、ずっと私のそばにいてくれたら、あんな風にイライラしたり、悲しくなったりすることもなく、いつも

ニコニコしていられるんだろうなぁ～

これから優雅とどぉなるのかということよりも、
とにかく、もう少し優雅と一緒にいられるということが嬉しかった。

第8話：優雅と涼の違い（後書き）

優雅・・カッコいいですね～w感謝の気持ちは大切です。　涼・・・女の子はちゃんと見てるんです。
さて・・ゆいのマンションの近くでおしゃべりして帰ろうと提案した優雅。このあと2人はどぉなるのでしょうか・・
次話で大きく話が動く予定です♪お楽しみに♪♪

第9話：今はまだ・・・

不思議と、優雅に対して警戒心なんかはなかった。運転する優雅の横の席が、なんだか居心地が良かった。

「ここからだっけ？」
車は大道りから少し細くなった道に曲がろうとしている。
「え？ここ？？」
「多分wゆいよりオレの方がこの辺は知ってるよww」
「そぉなの？」
「仕事で結構通るからw」
「そぉなんだwこの辺多いの？」
「ん～　そぉだね～wこの辺大学多いからねw」

そんな会話をしてるうちに、私のマンションが近づいてきた。
「どこにしよっかな～　近くに公園あったよね？」
「ぅんw」
私の大学のすぐ近くに公園がある。
公園か～wなんかいいかもw
毎朝私がマンションから大学まで歩く道を通り、大学のすぐそばの公園に着いた。
「このへんにしよw」
そぉいって優雅は車を公園の脇の道路に停めた。

「今まで何人の人と付き合ったの？」
「1人w」

・・1人・・・涼を入れないで、1人・・
付き合っていたと言っていいのかもわからないけど・・
「1人!?ホントに???」
「ぅん。」
「ゆいがフッたの?」
「ぅぅん。」
「フられたの?」
「・・ん~そぉなのかな~」
「え??」
「・・・フられたのかなwぅん。多分フられたんだねw」
優雅には私の言ってる意味がよくわかっていないみたいだ。
でも、それ以上その意味は訊こうとはせず、
「同い年?」
「ぅぅん」
「年上?」
「ぅんw」
「何歳?」
「3つw」
「3つってことは~　・・・オレと同い年じゃんww」
「ぅんww」　・・そぉ。私が19の時、彼は22だったから。
そんな人と、どこで知合ったのかは訊いて欲しくない。
誰にも言うつもりはない。
「なんか気まずいなぁw」
「なんで?」
「なんとなくw」
「そっか~・・」
気まずいのか・・なんか寂しい感じがした。
私の過去は関係ないのに・・
「社会人?」
「ぅんw」

「何の仕事??」
「なんかアパレル関係って言ってた。」
「へ〜　何かされた??」
「え?」
「だから・・変なことされなかった?」
「変なこと??」
「・・やっぱりいいw」
優雅が訊きたいことはなんとなくわかってた。
年上の社会人だから、身体目当てだったんじゃないかと思ったんだろう。
大丈夫だよ。優雅。
拓海は身体目当てではなかったから。・・・それ以前に・・

「どんな人がタイプなの?」
良かった・・拓海とどこで知合ったのかは訊かれなかっことにホッとした。
もし訊かれてたら私はなんと答えたんだろ・・
モルに言ったように、優雅にも嘘をついていたんだろう。
モル・・モルは私のお兄ちゃん的存在の人だ。
浪人の時にチャットで知合い、私の受験を支えてくれて、親にも言えない事を相談に乗ってくれた。
モルがいたから、私は浪人生活を乗り越えられた。
「ん〜　優しくて、明るい人かなw」　モルみたいに。
「へ〜　オレにも可能性ある?」
「え?」
「オレがゆいの彼氏になれる可能性はあるのかな〜ってw」
「ん〜・・・あるのかなぁ・・」

まさかいきなりそぉ来るとは思わなかった。
でも、そぉいう話をするために、お店を出た時「帰ろっか」とは言

わなかったのだろうというのはなんとなく思ってた。

可能性・・・あるよ・・
あるけど・・今は・・・

無言だった。
優雅は私のはっきりした返事を待っていて、私はどぉ言っていいのかわからなくて考えていた。

暫く無言が続き、
「悩んでるの？・・」
「・・ん～」
私がここまで悩む理由はただ1つ。
涼がいるから。
そぉじゃないならこんなに悩んでないよ。
「あるよ」って、すぐに言うよ。多分・・出会った時から私の心には優雅がいたのだろうから。
あの時はそこまで意識はしてなかったけど。
でも・・可能性はあるけど、今はまだ早すぎる気がする。知り合って、まだ会うのは2回目だ。

「嫌ならはっきり言っていいよ？」
「嫌ではないよ・・」
嫌なわけないじゃん・・
「じゃぁ、いいの？」
「・・・」

また無言になった。

暫く無言が続いて、
「オレが言ってること理解してる？」
「え？」
「・・・だから・・　オレ口下手だから・・」
「そぉなの？」
「口下手って意味わかる？」
「ぅん。多分。」
「思ってることをはっきり言えないってこと。」
「ぅん・・」
「だから・・オレの一目惚れだったの。」
「そっかぁ・・」
「ぅん。・・そぉじゃなきゃ連絡先きいたりしないよ？」
「そぉなの？」
「ぅん。」
初めて面と向かって告白というものをされた。
手紙とか、メールとかではあったけど・・
やっぱり、面と向かって言われるのが一番嬉しい。

暫く沈黙が続いて、
「よし。オレがゆいの彼氏になる。」
「え？」
「だめ？」
「・・・今？」
「ぅん。」
「・・もう少し待っててってゆうのはだめ？」
「だめ。今じゃなきゃだめ。」

・・・今・・無理だよ・・
いくらなんでもまだ早すぎる。それに・・
今は涼がいるもん・・
涼とのことをはっきりさせてから・・

かなりの時間が経ったように感じた。
時々車の横を、私の通う大学の学生がとおり過ぎていく。

「こんな時間に終るの？」
その学生を見ながら優雅は言った。
「ぅん。部活の帰りだと思う。」
「そっか～　おそくまであってるんだね。」
「ぅん。」

・・・・・・

！！！！！！！
長い長い沈黙は猫の喧嘩の声によって破られた。
優雅はビックリして体全体で反応したw
「びっくりした～　何？？」
「猫かなw　夜になるとよく喧嘩してるのw」
「へ～」
・・・
「ゆい？・・」
「ん？」
「ちゃんと考えてる？」
「え？」
猫のことで優雅の告白が微妙な感じになっていて、私もどぉしていいのか戸惑ってたところだった。

「オレ本気で言ってるんだよ？」
・・・・・・
「・・・絶対今？」
少しだけ・・少しだけ待ってて欲しい・・
「うん。今じゃなきゃだめ。」
「・・・・」

私の手が汗ばんできた。昔からだ。
緊張すると手に汗をかいてしまう。私のコンプレックス。
とそこに・・優雅の手が私の手を握ってきた・・
だめだよ・・

「手、汗ばんでるよ？緊張してるの？」
「うん。緊張すると手に汗かくの・・」
「昔から？」
「うん・・」
そのことにはもう触れないで欲しい・・
高1のときはこれで相当嫌な思いをした。
意識すると余計に手が濡れてくる。そぉなると、もう汗ばむというレベルではなくなる。
誰かと手を繋ぐなんて無理だ。みんな避けるし、退かれる。
きっと優雅も・・　誰だってそんな手嫌だって思うよ。仕方ない。
でも・・どぉすることも出来ないんだもん・・

ところが・・・
優雅は手を離したり、ゆるく握ったりするどころか、さらにぎゅっと握ってきた。

・・・
どぉして・・　こんな手・・
涼だって、私が手に汗をかいてると、握ってる手を緩めてしまう。
それが普通なんだと思ってた。思おうとしてた。
悲しかったけど。

でも・・優雅はちがった。こんな人は初めてだ。
優雅は私の全てを受け入れてくれる気がした。

第9話：今はまだ・・・（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます♪私的には、話が大きく動いたと感じているのですが、いかがだったでしょうか？　さて・・優雅に本気で告白されて、ゆいはどぉするのでしょうか・・

もしよければ、感想やアドバイスなど、ご意見をきかせていただけたら嬉しいです♪♪

第１０話：最低な女

「・・・ゆい？」
「・・ん？」
優雅は私の手を握ったまま私をまっすぐ見ていた。
「いい？」
私を覗き込むような感じになって優雅の顔が凄く近いところにある。
もう限界だ。これ以上・・優雅も、私自身の心も、ごまかすなんてできない・・
「・・ぅん」
私がそぉ言って小さく頷いたのと同時に、私の手を握っていた優雅の手がはなれ・・
優雅の顔がさらに近づいてきて・・・

優雅とのはじめてのキス。優しいキスだった。
優雅の唇が離れたかと思うと、角度を変えて、再び唇を重ねてきた。
そして・・ゆっくりと優雅の舌が入ってきた。
私は反射的に少し抵抗した。けど・・優雅はおかまいなしだ。

まだ会うのは2度目で、しかも今日がはじめてのデートで、今日告白されて・・キスまでするなんて・・・　展開がはやすぎる・・

キスなんて涼以外の人とはしたことなかったし、涼とだって・・
こんなに時間をかけて優しくされたことは無かった・・
だから・・どぉしていいのかわからなくて、ただ優雅のなすがままになっていた。
ドキドキだった。
一瞬涼への罪悪感を感じた。

でも、優雅の優しいキスにその罪悪感も消されていった・・

何もかもが涼とは違った。
正直・・涼とのはじめてのキスがとこでだったかさえも覚えてない・・
私のファーストキスだったのに・・・

でも、私の中では優雅とのキスが私のファーストキスだ。自分でも何を考えてるのかよくわからない。
でも・・どこかで涼を彼氏とは認めようとしてない所がある。
いや・・認めてないんだと思う。認めてたらこんなことにはなってない。

ごめんね涼・・
私は弱い人間だよ。
最低な女だよ。
浮気なんて絶対許させないって思ってるし、最低だって思ってる。
なのに・・
私のしてることは完璧浮気だよ・・
自分が大嫌いだ。

優雅・・
ごめんね・・
私・・　嘘ついてる・・・

でも優雅が好き。
好きじゃなかったら、こんなに悩んでない。
二股はかけたくない・・

でも・・今の私にはどうすることも出来ない。
あんなに私のことを大切にしてくれてる涼を今振るなんてできない。
だけど、このままでいいなんて思わない。
二股なんて、私が耐えられない・・
だから・・私が涼に嫌われないと・・
それが一番涼を傷つけないだろう・・
でも結局は、自分を守るためにそぉ思うだけなんだと思う・・
確かに涼は傷つけたくない。
でも、それよりも自分が傷つくのが嫌なだけなんだと思う。
自分から別れ話をするのが嫌だから、怖いから、嫌いになってもらおうなんて考えちゃうんだよね・・
私は最低だよ。

でも・・私はもぅ、優雅と本気で恋愛したいって思ってる。

優雅の唇がゆっくりと離れていく。
私は恥ずかしくて目を合わせることが出来ない。

「ゆい・・」
「ん？」
「今日は一緒にいたい。」
「ぅん・・」
その意味がよく理解できなかった。私も純粋に一緒にいたいって思った。
「ゆいの家にいっていい？」
「ぇ？」
・・・　私の家？・・・
それはまだ・・　お泊りはいくらなんでも早すぎでしょ・・
「ダメ？」

「・・・」
ここで嫌と言ったら、私は優雅とは一緒にいたいって思ってないと思われちゃうのかな・・
そんなことないのに・・
「家がダメなら他のとこいってもいいよ？」
「・・・」
他のとこって・・・
ホテルってこと・・？

嫌だ。それは絶対嫌。
優雅にお金使わせちゃうし、なにより・・・
抵抗があった。
「好き」だからじゃなくて、別の目的で行くようで嫌だ。
「他のとこいく？」
「いかない・・」
「じゃぁ、ゆいの家いっていい？」
選択肢は2つなの・・？
お泊りしない　って選択肢はないの・・？

私は優雅が好きだよ・・・？
だけど・・
お泊りということは・・
キスだけでは終らない・・って思ってたほうがいいよね・・

一瞬優雅を疑ってしまった。
結局は体目当てだったんじゃないのかな　って・・
でも、そんな疑いはすぐに消えた。
そぉだったら、告白なんてしないよね？
こんなに私の返事まったりしないよね・・？
「本気だよ」なんて言わないよね・・？

「ゆい？」
「ん？」
「一緒にいたい・・」
「ぅん・・」
「行ってもいい？」
「・・・ぅん・・」
信じたかった。
私も優雅と一緒にいたかったし・・
もしかしたら、ホントに一緒に過ごすだけで、何もないかもしれない。
もしそぉだったら、優雅はホントに本気なんだって思えるし・・
でも、ある程度は覚悟してた。
そぉじゃなきゃ、ダメージが大きいし。

もしものために、ちゃんと家も片付けてきた。
ホントにその「もしも」
の状況になっちゃうなんて・・

「あっつい。」
優雅が運転席にもどり、言った。
「暑い？」
「ぅん。緊張してたから。まだドキドキしてる。」
「そっかぁ・・」
「これから何でも相談してね。」
「ぅん」
「彼氏なんだから。」
「ぅん・・」
「1ヶ月に2回くらいしか会えないと思うけど・・」「そぉなの・・

？」
「うん・・　仕事が忙しいから・・・」
「そっか・・・今日は大丈夫だったの？」
「うん。今日は早く終る日だったから大丈夫。」
「そっかぁ・・・」

月2回かぁ・・・
辛いなぁ・・・
でも仕方ないよね・・
このとき　涼に怪しまれないでやっていけそうだ　って考えが一瞬頭をよぎった。
私はどこまで最低な女なんだ・・

「よし。ちょっとコンビニ行っていい？」
「うん」
「お泊り道具とか持ってきてないからw」
「そっかぁw」
持ってきてたら確実にそれ目当てじゃん。

車はコンビニへと向かった・・

涼・・ごめんね・・

第１０話：最低な女（後書き）

こんにちは♪
投稿がおそくなってしまってすみません・・
今回は自分の中で色々考えました。複雑な気持ちです。浮気や二股なんて、ホントに最低だって思います。でも、もし、あなたが　ゆい　の立場だったらどぉしますか？
読者の皆さんからしたら、　ゆい　は軽い女の子だと思われているかもしれません。たしかにそぉ思われても仕方ないんです。でも、ゆい　は決して軽い女の子ではありません。少し、心に穴が開いてる部分があるだけなんです。
これから先、ゆい　の印象が悪くなってしまうかもしれません＞＜
でも、見守ってやってください・・

第１１話：好きだってぃぅ気持ち（前書き）

投稿大変おそくなりました＞＜すみません・・
投稿を待ってくださった方がいらっしゃれば幸いです。
今回もなかなか進展がありませんが・・

第１１話：好きだってぃぅ気持ち

コンビニへ行く間、何を話したのかさえよく覚えてない。
それだけ自分の中で混乱してたんだと思う。
これからどぉなってしまうのか、そのことで頭が一杯だった。

私のマンションからそんなに離れてない、駅のすぐ近くのコンビニの前で車は停車した。
特に道の端に車を寄せるわけでもなく、気持ち寄せてますってくらいのとこに駐車した。

「ゆいも来る？」
優雅が優しい眼で私の方を見て言った。
「ぅん。」
車で一人で待つのはどぉかと思い、一緒に降りることにした。

一緒にコンビニに入る。
なんか嬉しかった。

優雅が必要な物をどんどんカゴに入れていく。
ビールも一缶。
「ゆいも飲む？」
と訊かれたけど、「ぅぅん」と答えた。

会計を済ませた優雅が、店内をうろうろしていた私を、大切なものを見るような感じで私を見ていた。
「行こっか」
「ぅん」
その時優雅が私のあたまをポンポンとした。

なんか大切に思われてる気がした。
店員さんの視線が気にならなかったわけではない。
こんな時間に、男がお泊りグッズを買って、しかも女の子が一緒だったら、今晩一緒に過ごすということくらいは容易に推測できることだろう。
でも、この時の私は、他の人の目なんてどぉでもいいって思えた。
いつもは人の目ばっかり気にしてるのに。

コンビニを出て優雅の車を見たとき、やっぱり真ん中すぎで、なんかおかしく思った。
「やっぱり真ん中すぎｗｗｗ」
「そぉ？」
「ぅんｗ」

車は来た道を再び戻って行く。
・・・何を話していいのかわからない・・・
特に何を話すということも無く、私はなんとなく外を見ていた。
車は赤信号で停車した。

「ゆいの家の近くに駐車場とかあったっけ？」

「ん～　あったかなぁ・・」
「ｗｗｗ多分ゆいより俺のほうがしってるなｗ」
「そぉなの？？」
「この辺仕事で結構来るから。」
「そっかぁ。大学多いしね。」
「うん。」

「ん？これ駐車場？停めていいの？？」
「病院の駐車場？」
「ん？なんか書いてある？」
「え？」

そこには看板があり、一般の人はお金を払えば停めていいようだ。
優雅は慣れた様子で車を停め、私たちは車を降りた。
車を降りて数歩歩いたところで、優雅が私の手を握った。
とても自然な感じで。

凄くドキドキしてる。
でも、今は手に汗はかいてない。
よかった・・

「なんかいいね」
「え？」
「こぉいうの。付き合ったばっかりって感じで。
新鮮。」
「ぅん。」

涼と初めて手をつないだときは・・こんな感じではなかった。
何が違うのかはよくからないけど・・
一番違うのは、私の気持ちなんじゃないかなって思う。

「ゆいと飲みたいな～」

「え？」
「今度ゆいとここに来よ。」
私のマンションの、すぐ近くにある飲み屋さんの前を通る時に優雅が言った。

はっきりとした約束とかじゃないけど、“今度来よう”って言ってくれたのが凄く嬉しかった。
付き合ってるんだからまた会えるのは当然だけど、“今度”があることが嬉しかった。

告白されたことで、身体目的で今日会おうとしてたんじゃないんだなって思った。
けど、どこかで不安だった。
だから“今度”があることがほんとに嬉しく思ったし、1日だけの相手ではないんだなって思えた。

こんな気持ちは初めてだ。
ホントに幸せ。
告白された時は、あまりにも急なことで迷ってしまったけど・・
私自身、優雅に初めて会ったあの日から、
心の中でどんどん優雅の存在が大きくなってた。

今の私は、優雅が好き。
いつも自分が恋してるって気づくのは、その人が他の女の子と話してたりするのを見たときに、
“嫌だ”って感じた時だった。
今回はやきもちとか感じる前に告白されちゃったから、“好き”って感情が自分でもよく分からなかった。
けど、今こうして心から幸せだって感じれるってことは、好きだからなんじゃないかなって思う。

初めて、好きだって思った人と手を繋いでる。
これからも、こんな風に手を繋いで歩けるんだな♪
私はもぅ、何も不安に思ってることなんて無かった。

そんな幸せな気持ちで、空を見てみると、
星がきらきら輝いていた。
5月はまだ始まったばかり。
夜になるとまだほんの少し空気が冷たい日だった。

第１１話：好きだってぃぅ気持ち（後書き）

読んで下さってありがとうございます♪
進展がなくてすみません・・
今後もこんな感じで進んでいくと思います・・

ゆいは幸せを感じてます。ほんとに優雅を信じてます。
涼はどぅなるの！？って思ってる方もいらっしゃると思います。ゆいだって自分が最低なことをしてることはわかってるんです。
涼は今後ちゃんと出てきますので・・

今後もどぉぞ見守ってやってください。

第１２話：彼氏として。

もぅ少しこのまま歩いてたいな・・・

一人で歩くマンションまでの道は遠く感じるけど、誰かと一緒だとすぐに着いてしまう。

でも、今日は優雅も仕事からそのまま来たわけだし・・
疲れてるだろうし、今日だけじゃないし。
そぉ思って私は“もぅ少しこのまま歩いてたいな・・・”って気持ちを心に閉まった。

というより・・・言えなかった。さっき付き合うことになったのに、そんなこと言えなかった。

マンションの前に来ると、自然と手が離れた。
鍵・・出さなきゃだもんね・・・

この部屋に優雅が来るのは2度目。
1回目は仕事で。
2回目は彼氏として。

「相変わらずきれいにしてるねW」

「ぅん」

昨日他の男がいたとは思えないほど片付いていた。
まさか男が出入りしてるなんて誰も思わないだろう。
念のために片付けといてよかった・・・
そぉ思うのと同時に、涼への罪悪感を感じた。

「あW組み立てきれてんじゃん。」
「ぅん。ひとつだけだけど。」
あの時、この収納棚を私が組み立てきれるか心配してたもんねW
電話までしてくれたしW

「簡単だったでしょ？W」
「ん～～　結構時間かかったよ？」
「そおなんだWWWもうひとつは組み立てないの？」
「ん～　まだどこに置くか決めてないから。決めてからにするの。」
「そっかW」
今度は優雅に組み立ててもらお♪
組み立ててる優雅はかっこいいんだよなぁ♪

男の人が仕事してる姿はかっこいい。力仕事なんかは特に。
優雅が仕事でここに来たときも、優雅がテーブルやイスやチェストを組み立ててる姿はかっこよかった。

また見れるんだ♪

優雅は一通り部屋を見て、私の向かい側の席に座った。
これも優雅が組み立ててくれたものだ。

「やっぱりいいね～W」
優雅は自分が組み立てたテーブルを見ながら言った。
そして、早速さっきコンビニで買ったビールを出した。
「ゆいも飲む？」
「うぅん。」
「そかW　お風呂入ってきな。」
「あ・・先に入っていいよ？私長いから・・」
「俺はビール飲んでるから。先に入っていいよW」
「そっか・・　眠くなったら寝ててねW」

一人暮らしだと誰にも迷惑をかけないからお風呂も長くなっちゃう。
私のお風呂は1時間コースだ。

だけど今日は優雅がいるし・・
私はできるだけ急いだ。

けど・・・

お風呂場のドアを開けると、優雅の姿がない・・

・・・zzz
ベッドの横のカーペットの上に自分の腕を枕にして横になってる優雅の姿が・・
寝ちゃってるんだ・・
うぅ・・・結局1時間位入ってたんだ・・
時計を見るともう22時を回っていた。

!!!
私の気配を感じたのか、優雅が飛び起きた。
優雅は大きな目をさらに大きくして、
「あWびっくりした～」
「あ・・ごめん・・」
「長かったね～WWW1時間!?W」
「ぅん・・・だから寝ててって言ったの・・」
「WWW　俺は寝てないけどねW」
「寝てたよW」
「寝てないW　よし。お風呂かりていい?」
「ぅん」

なんか嬉しかった。こぉいう会話ができるのが。優雅が仕事でここに来たときとは違う。
他の人からしたらたいしたことない会話かもしれないけど、
私には凄く新鮮だ。付き合ってるんだって思えた。

はやい・・
私が髪を乾かしてる間に優雅はあがってきた。
優雅にはサイズが大きいタンクトップに、これもまた優雅にはサイ

ズが大きいトランクス。
サイズが合うのがなかったんだな。

「あんまり見ないでW恥ずかしいからW」
「そっかWW」
「ドライヤー使う？」
「ぅうん。すぐ乾くから大丈夫W自然乾燥で。」
「そっかW」
私は使っていたドライヤーを片付け、敷布団を敷いた。
昨日涼と寝てた敷布団・・
今朝ちゃんと洗ったけど。シーツも布団カバーも枕カバーも、私のベッドの布団カバーも枕カバーもすべて。

優雅は敷布団を敷く私を見て、
「優しいね。」
「そぉ？W」

手伝うわけでもなく、ただ見てるだけの優雅。
手伝ってくれるのが普通だと思ってた。
涼がそぉだから・・
優雅はそぉいうの、手伝ったりする人じゃないのかな・・
正直敷くか迷った。洗ったとはいえ、涼と寝てた布団だし・・
でも、付き合うことになったその日から同じ布団で寝るのは・・
とりあえず敷こう。そぉ決めたのだ。

布団も敷き終わり・・・
何をしたらいいんだろ・・

涼のときは特に何をするわけではないけど・・
涼と優雅ではどこか違う。
多分、優雅のことを意識しすぎなんだと思う。
付き合い始めたばっかりだから仕方ないのかもだけど・・

なんか、すごくドキドキする。
涼といるときは全然ドキドキしないのに・・
ドキドキしたのは初めて涼に会ったときかな・・
顔も知らなくて・・
不安で・・
ドキドキしてた。
でもそれ以来、涼にはドキドキしない。
初めてのキスのときも、初めて一緒に寝たときも。

私にとってはファーストキスだったし、当然男の人と寝るのも初めてだった。

けど・・ドキドキしなかった。
私の初めて・・
そんなでよかったのかな・・
もし初めての相手が優雅だったら・・・

「いつも何時くらいに寝てるの？」
「ん～　１２時くらいかな？」
「そぉなんだＷじゃぁ、いつもはこの時間はまだ起きてるんだ。」
「ぅん。いつも何時くらいに寝てるの？」　優雅のことをなん

て呼んでいいのかわからず、そのまま訊いてしまった・・
「俺は１２時前かなW早いときにはもぅ寝てるWW」
「そぉなんだ・・早いねW」
「ぅん。朝が早いからね。」
「朝は何時に起きるの？」
「６時に起きて、６時半には家出てる。」
「・・早いね」
「そおでしょ～W」
「明日も？」
「ぅん。」
「そっかぁ・・」

ほんとに忙しい人なんだな・・
明日も朝早いのに今日来てくれたんだ・・

「・・まだ眠くない？」
「寝ようと思えば寝れるW」
眠くはなかったけど、明日も朝が早い優雅はそろそろ寝ないと朝きついしね。
寝ようと思えば寝れるでしょ。

「じゃぁ・・もぅ寝る？」
「ぅん。」

時計を見ると、２３時を回っていた。

第１２話：彼氏として。（後書き）

投稿また遅くなってしまいました＞＜　ごめんなさい・・　いろいろありまして・・

１２話まで読んでくださり、ありがとうございます。家にくるまでで１話ですW毎回なかなか話が進まなくてごめんなさい。
このお話を早く完結させたくはないんです。勝手ですみませんm―m

もぅ２月ですね・・２月といえば・・バレンタインデー☆皆さんはどのように過ごす予定ですか？片思いの方、今年こそは勇気を出してみてはいかがでしょうか？私も・・・頑張ります♪♪
次話の内容はバレンタインにはなりませんが、１４日までに投稿できたらなぁと思っております♪
今後も、どぅぞよろしくお願いします。

皆さんにとって、バレンタインが素敵なものになりますように・・・
★

第１３話：ただ好きだから（前書き）

※一応Ｒ１８でお願いします。
苦手な方はとばして読んでください。

第13話：ただ好きだから

「俺、ゆいと一緒に寝るよ？」
「え？」
「だめ？」
「だめではないけど・・」
「けど？」
「・・ううん。なんでもない。w」

いやではないけど・・・
いくらなんでも展開が速すぎる。
男の人が一緒に寝たいと言った時、一緒に寝て何もないはずがない。
と私は思ってる。

まれに、ほんとに隣で寝るだけって人もいるけど、そぉゆう人はものすごくすばらしい人だ。

涼でさえ初めて私の部屋に来たときは、
別の布団で寝たのに・・

付き合うことになったその日に同じ布団で寝るのは・・
でももしかしたら、ほんとに一緒に寝るだけかもしれないし・・
私には　だめ　なんて言えなかった・・・

「ゆい」
「ん？」
「おいで」

そぉ言って優雅は腕枕をしようとしてきた。

優雅の腕は、程よく筋肉がついており、
程よく日焼けしている。
凄くきれいな腕。

私は腕フェチなのかもｗｗ
この日から、私は腕枕がどんな枕よりも落ち着くっことを知った。

でも誰でもいいわけじゃない。
優雅の腕枕じゃなきゃだめなの。
隣にいるのは優雅じゃなきゃ・・

「腕しびれてない？？」
「全然。大丈夫だよｗ」
「そっかｗよかった」

涼はすぐしびれちゃうのに。

「ゆい」
「ん？」
キスされる。
そぉ思ったときにはもぅ優雅の唇は私の唇と重なっていた。
触れるだけのキス。
一度はなれて、また重ねてくる。
でも今度は触れるだけじゃなくて・・
優雅のやわらかい舌が入ってくる。

もぅ私にはどぅしようもできない。
ベッドで深いキスをしてしまったら、その先がないはずがない。
どんなに我慢できる人でも、限界だと思う。
優雅は私に腕枕をしたまま、少しだけ体を起こしてキスを続けている。

慣れてる。
そぅ感じた。
心がズキッと痛む。

そして・・
腕枕をしていない左手が私の右胸に触れた。

やっぱり始まってしまうんだ・・
そぉ思ったとき、
優雅の左手ははなれ、唇もはなれた。

腕枕はそのままだけど、
優雅の体は天井のほうを向いてる。

抑えてくれてるのかな・・
私は優雅のほうを向き、
私の頭の下にある優雅の右腕にできるだけ負担がかからないようにした。

優雅の腕がすき。
ほんとにすごくきれい。
・・・これまでにどれくらいの人がこの腕に頭をのせたんだろぅ・・

「ゆい？」
「ん？」
「・・ゆいを抱きたい」
「・・・」
「ゆい」
「・・・」
「ゆい？？」
「ん？」
「だめ？」
「・・今日はもぅ寝よ？」
「ゆいを抱きたい」
「明日も早いし・・」
「ゆいのためなら寝なくても平気。」
「でも・・今日はやめとく。」
「なんで？」
「・・・」
「ちゃんと言って？」
「・・心の準備ができてない」

抱くって・・
抱きしめるってことじゃないんだよね・・？
やっぱり抑えきれなかったんだ・・
複雑な気持ちだ。
はじめからそのつもりだったのかな・・
そのためだけに・・
私はただ遊ばれてるだけなのかな・・
忘れ去っていた不安が一気によみがえってきた。

「心の準備できそぅ？」
「今日は無理・・」
「今度いつ会えるかわからないんだよ？・・・」
「・・・」

優雅は泣いていた。
はっきりはわからないけど、多分。
その涙にはどぅいう気持ちがこめられてるの？
その涙は、私に拒絶されたことに対してながしてるの？・・・

「ごめんね？」
「ううん。無理言ってごめんね・・
俺のこと、嫌いになっちゃった？」
「そんなことないよ？」
「ゆぃ・・」
「ん？」
「どぉしてもだめ？」
「・・・」
「好きだからするんだよ？」
「ぅん・・」
「優しくするから」
「・・・ぅん」

もぅこれ以上　だめ　とは言えない。
遊びで、どぉでもいいと思ってるなら、涙までは流さないだろう。

右腕は私の頭の下に置いたまま
優雅はまた体を少し起こして唇を重ねてきた。

舌も入ってくる。

左手が私の胸に触れる。
何度かTシャツの上から撫でて
その手は背中へいき、
Tシャツの上から下着をなぞる。

キスを続けたまま、Tシャツの中に手が入ってきた。
慣れた手つきでブラのホックをはずしていく。
そのまま下着の中に手が入り、生で胸に手が触れる。

緊張で汗がやばい。
すると、それに気づいて
「汗かいてるじゃん。ズボン脱ごっか」
そぉいって私の下のジャージを脱がしていく。

緊張なのか怖いのか、
自分でもよくわからないけど体に力が入ってる。

涼と初めて一緒に寝たときもこんなだったっけ？
不思議なくらい、涼とのはじめてのことを覚えていない。
初めてのキスも、初めて一緒に寝た夜も。

「もしかして、初めて？」
「・・・」

初めてって、どこからのことを言ってるの？
「ゆい？」
「ん？」
「初めてなの？」
「・・なにが？」
「こぉいうことするの」
「・・・」
「ちゃんと言わなきゃわからないよ」
「・・・初めてだけど、初めてじゃない。」
「え？どっちなの？」
「初めてだけどはじめてじゃないの」

ほんとにそぉなんだもん・・
涼とは・・
最後までしたことはないから・・
優雅は最後までするつもりのはず。
だったら、初めてだよ？
だけど・・
これをどぉ言ったらいいのかわからないよ・・

「・・・まぁいいや」
「・・・」
怒っちゃったかな・・

「リラックスして」
「うん・・」

そぉはいっても、なかなかリラックスなんてできない。

優雅に触れられたら、それだけで体が硬くなっちゃう。
優雅の手が私の大事な部分に近づいていく。
涼もまだ知らないそこに、優雅の指が入る。

初めての感じ・・
何か変な感じ。
気持ちいいってよく聞くけど、全然そぉは思わない。
ほんとになんか変な感じ。
どぉ表していいのかわからないけど・・

「！！！」
優雅の指が少しずつ奥に入ってくる。

涼のときは少しでも指が入っただけで
無意識に体が拒絶してた。
でも、今は違う。
拒絶はしてない。
と言うより・・
拒絶はしたくない。
だから必死に絶えてる。
左右の手で布団をギュッと掴み、
だんだんと速くなってきている指の動きに必死に絶えている。

拒絶なんてしたくない。
好きだから。
ただ好きだから。

「気持ちいい？」
「・・よくわからない・・・」

「なんか変な感じ？」
「ぅん・・」

私の中からなにか熱いものが流れてくる気がする。
膜・・破けたかな・・？
指では破けないのかな・・

こぉいう事に関しては全く何の知識もない。
経験もないし。

「・・ん」
優雅の指が抜かれた。
なんか凄く暑い。

目の前に優雅の顔がくる。
しっかりと布団を掴んでいた手をとり、
今度はその手に優雅の手が絡められた。
そのまま唇が重ねられる。

「愛してる」
初めて優雅の口から出た言葉。
一目ぼれだった　とは言われたけど、
好き　とかそぉいう事は言われなかった。
「ゆい　愛してるよ」
「ぅん・・」
「ゆいは？」
「・・・愛してる」
そしてまた唇が重ねられる。

涼には一度も、頼まれても言わなかった言葉。

それを、優雅にはこんなに簡単に言えてしまう。

第１３話：ただ好きだから（後書き）

お久しぶりです。遅くなってしまってごめんなさい・・
もぅ４月も終わっちゃいますね。ゴールデンウィークｗゆいと優雅の記念日が近づいてますｗ

ストーリーはまだまだ付き合うことになったその日のお話です。

今後とも、長い目で見守ってください。

全く関係ない（今のところは・・）話なんですが、男女の友情ってあると思いますか？
私はあるって信じてるとゆうか、信じたいんですけど・・　どぉなんでしょうかね。
この話が関係してくるのはあと何話先になるかはまだ未定ですが・・

どぉぞお楽しみにｗ

第１４話：一番の幸せ（前書き）

更新遅れてごめんなさい＞＜
待ってくださっていた方がいらしたら、幸いです。

今回も年齢制限させていただきました。
苦手な方はとばしてください。

第１４話：一番の幸せ

私も一目ぼれだったのかもしれない。
仕事で家に来たあの日から、頭の中は優雅のことでいっぱいだった。

だけどはじめは、
ちょっと気になる　程度。

もう二度と会うことが無かったら、私の記憶からなくなってしまうのに時間はかからなかっただろう。

でも、私達はあの日で終わらなかった。

『愛してる』
私にとってこの言葉がどれほど重いものか・・・
簡単に言える言葉ではない。
本当に本当に好きな人じゃなきゃ言えない。
それがふつうのはず。
涼にはどうしても言えない。
嫌いじゃない。好きだけど・・
そぉいう意味の『好き』じゃない・・・

優雅に言った「愛してる」は私の心からの言葉。
それに満足したように、優雅はゆっくりと深いキスを続ける。

「ゆい・・」
「・・ん？」
「入れていい・・？」
「・・・」
じっと優雅を見つめる。
愛してるから、なんだよね・・？
「ちゃんと避妊するよ？」
ちがう。
そんなことを気にしてるんじゃない。
確かに避妊はものすごく大事だけど・・

「ゆい？」
私は小さくうなずいた。
愛があるなら、それでいい。
私はあなたが好きだから、愛してるから。
展開ははやすぎるけど、これが優雅の愛なら、私は喜んであなたに抱かれよう。

また優雅の指が私の中に入ってくる。
私の中で優雅の指が激しく動く。
私の中から熱いものが流れてくる気がする。

ゆっくりと指は抜かれ
今度は指ではなく、優雅のそれが入ってくる。
でも、やっぱりなんか怖い・・
自分が未知のことをするのは怖い。
身体に力が入ってしまう。
力が入ってるとより痛く感じるって聞いたことがある。

だけど・・
力を入れないようにって思っても、無意識に身体が反応して力が入ってしまう。

「ゆい」
「リラックスして」
優雅の甘い声が聞こえる。
ベッドのシーツを握り締めてる私の手をとり、
優雅の指が絡められる。

「俺の目をみて」
きつくつぶっていた目を開ける。
優雅のきれいな瞳。

「力抜いて」
優雅に手を握られて、
見つめられて、
強引にではなく、私の顔をうかがいながら、自分を抑えながらの優雅に
愛を感じる。
身体から少しずつ力が抜けていく。
すると優雅にもそれがわかったようで、少しずつ、ゆっくりと私の中に入ってくる。
だけど、少し進むとまた力が入ってしまう。

何度かそれを繰り返して・・
優雅のそれは私から抜かれ、優雅は私に深いキスをしてきた。

「あんまり無理するとよくないからね」
優しくそぉ言って私の下着を見つけ出してくれた。

「ごめんね・・・？」
「ぅぅん」
優雅はまた腕枕をしてくれて、私は優雅に甘えるようにくっついた。

これが一番幸せ。

優雅・・
怒っちゃってないかな・・
私を嫌いになってないかな・・
だって・・・
優雅は気持ちよくなってないと思うから。
自分の中に溜めたままで終わっちゃったと思うから・・

結局、優雅は最後までは入れてない。

ごめんね・・
受け入れたかった。
心では、頭ではそぉおもってたけど・・
身体が気持ちについていけてなかった。

でも、優雅を拒否ったわけじゃないよ？
はじめてのことだったから・・
身体がびっくりしちゃったんだ。

強引に最後までするのではなく、自分を抑えてくれた優雅。

今も腕枕をしてくれて、優しく抱きしめてくれている。

これが一番幸せ。

終わった後、冷めたようにすぐ寝ちゃったらどぉしよぅって、怖かった。

そんなの、愛なんてないと思うから。

でも、違った。

最後までできなかったのに、それでも当然のように腕枕をしてくれて、

優しく抱きしめてくれている。

「ゆぃ？」

「ん？」

頭を少しずらして優雅を見る。

「寝ちゃったかと思ったw」

「まだw　眠くないの？？」

「ゆいが寝るまで起きてる」

「そっかぁ・・」

「今日は何か予定あるんだったよね？」

「ぅん。高校のときの友達に会うの♪」

「何時から？？」

「17時50分に集合なの。」

「夕方なんだw」

「ぅん。」

「じゃぁ、それまでゆっくりしてるんだよ。」

「ぅんw」

やばい。優しすぎる。
優雅のためにも早く寝なきゃ。

「明日は何時起き??」
「直接仕事行くから、６時半かなw」
「早いね。目覚ましかけてる??」
「俺は目覚ましなくても６時半になったら自然と目が覚めるから大丈夫w」
「そぉなの??」
「すごいでしょw」
「うんw」

優雅は腕枕をしてくれたままで、
子供をあやすおかぁさんのように私の背中を優しく、一定の間隔でたたいてくれる。
何年ぶりだろう・・
小学生の位のとき、風邪ひいたときによくおかぁさんがこぉやって私を看病してくれた。
大好きな人の腕の中で、私は幸せな気持ちでいつの間にか眠っていた。

ん・・
何かごそごそっていう感じで目が覚めた。
隣にいるはずの優雅がいない。

「あ、起しちゃった？」
ベッドサイドで着替えている優雅を見つけた。
「おはよ・・早いね・・」
「ちゃんと6時半には目が覚めるのw」

ここにはじめて仕事できたときと同じ格好。
仕事着だ。

「よし。今日は夕方まで時間あるんだから、ゆっくりしてるんだよ。」
「うん。」
「行くねw」
「ごはんは？？」
「いつも会社に行ってから食べてるからw」
「そっかぁ」

私も起きて玄関まで見送る。
「じゃぁ、また連絡するね。」
「うん。がんばってね。」
「うん。」
「行ってきます。」
「いってらっしゃい」

いってしまった・・
やっぱり朝早いな・・

今度はいつ会えるのかな。
凄く幸せな気持ちで眠ってた。
凄く幸せな気持ちで目覚めた。
目覚めたときに好きな人がそばにいるって、凄く幸せな気持ちになるんだなぁって実感した。

ベッドに戻る。
さっきまでここで優雅と寝てたんだって思うと、幸せな気持ちになる。
シーツに血はついてない。
やっぱり・・まだ破けてないのかな・・

今日、仕事が終わってから優雅から連絡が来るものだと思ってた。
涼は毎日連絡くれるから。
それが普通だって思ってた・・・

ゴールデンウィーク真っ只中。
今日は夕方まで時間がある。
幸せな気持ちで、私は再び眠りについた。

第１４話：一番の幸せ（後書き）

こんばんは。優璃です。
更新が大変遅れてしまい、申し訳ないです＞＜

梅雨ですねｗ
じめじめです＞＜
蒸し暑い毎日ですが、暑さに負けずに頑張りましょうｗ

もぅお気づきの方もいらっしゃるとは思いますが、『あなたを信じて・・・』の関連作品になる『ずっとこのままで。』も投稿はじめました！！『あなたを信じて・・・』でこれから先登場してくる、ある人物と　ゆい　のお話です。
どちらの作品をを先に読んでも大丈夫なようにする予定ですｗ
『ずっとこのままで。』の方も、よろしくお願いします♪♪

誤字脱字、感想等、どんなことでもかまいません。一言でもお言葉をいただけたら幸いです。

第１５話：光らない携帯（前書き）

またまた更新が遅くなってしまってごめんなさい。

「」は会話（電話も含む）
『』はメールを表しています。

第１５話：光らない携帯

さっきから何度も携帯をさりげなくチェックしてる。
気になって仕方ない。

もぅ仕事終わってると思うんだけど・・
携帯は着信のランプを発することはなく・・

「さっきから携帯気にしてるけど、どぉかした？」
「あ、ごめん。どぉもしてないw」

久しぶりに会った高校のときの友達。
みんな全然変わってなくて。
何か懐かしい。
だけど１つだけ、祥ちゃんに彼氏ができていたのには驚いたw
そんな感じの人ではなかったからw

「あ～もしかして、彼氏？」
「え？ちがうよw」
「で？ほんとのところはどぉなの？？　ゆい　のそぉいう話はまだ聞いてなかったw」
「www」
「こら～　ごまかさないw」
「はぃw」

祥ちゃん　と　ゆきちゃん　がガンガン責めてくる。

ともちゃん　はそれを楽しそうに笑いながら見てる。
この3人はいつもこんな感じだった。

「で??この2年、なんにもなかったの???」
「ん～・・・」
「なになに??」
「なぁんにも無かった訳ではないよ」
「おっと～w　いつ??」
ん～　どぉ言えばいいのか・・
涼は浪人のときからだし・・
でも出会ったいきさつを聞かれたら・・
とても人にいえるような出会い方ではない。
私はそぉゆう仮面を被ってるから。

純粋　清楚　おとなしい　真面目　天然

友達にも、初対面の人にも、みーんなにこぉ思われてる。

ほんとの私はそんなんじゃないのに・・

でもこれが私の
普段の姿。

ほんとの自分がどれなのか、いまいちよくわからない。
ほんとはいつも、誰の前でも素の自分でいたいのに・・
どぉしても、見た目で判断されてしまって、今のような仮面を被る
ことになってしまう。
ずーっとこれが悩みだ。

純粋　清楚　おとなしい　真面目　天然
でいる時間がほとんどで、本当の自分が自分にもわからない。

皆ほどよく酔ってて、結局私の話は自然消滅してしまったw
終電の時間が近づき、私は先に帰ることになった。
あとの3人はまだ帰らないらしいwww
方向音痴な私のために、みんなで駅まで送ってくれることになった。
ゆきちゃん　と　ともちゃんは私と祥ちゃんより少し後ろから歩いてきてる。

「そぉいえば、さっきの話。実際今彼氏いるの??」
祥ちゃんが真面目に聞いてきた。
祥ちゃんとは中学のころからの付き合いで、よく私のことを気にかけてくれる。
面倒見がいい。

「ぅん。いるよ。」
真面目な祥ちゃんにごまかしなんてできない。
「おぉ〜　浪人の時から??」
「ぅぅん。こっちに来てから」
「え、じゃぁ最近じゃん!」
「ぅんw」
「へぇ〜　ちゃんとした人なんだよね?」
「ぅんww大丈夫w」
深くは聞いてこない。

私から話したときはしっかり聞いてくれる。
それが祥ちゃん。
今回もそれ以上は聞いてこなかった。

居酒屋さんから駅まではそんなに遠くなく、すぐに着いてしまった。

「じゃぁ、気をつけて。」
「電車大丈夫??」
「ぅんw多分ww何とかして帰るw」
「そっかww分からなくなったら電話してw」
「ぅんwありがと。」
ゆきちゃん、ともちゃんはいつも頼りになる。

「じゃぁ、彼氏によろしくw」
「ぅんw」
祥ちゃん。
見守ってくれててありがとw
祥ちゃんの言葉に後の2人がなんか騒いでるけど、笑顔で手を振って別れた。
祥ちゃん、これから質問攻めだなww
私の代わりにwごめんねww

携帯を見ると、やっぱり着信は入ってなくて・・・
アドレス、聞いとくべきだった・・

受信ボックスには涼からのメールが。
『今日東京に来てるんだよね?もぅおわった??』

複雑な気持ちになりながらも返信する。

『終わったw』

送信してすぐに電話がかかってきた。

涼。

優雅ではない・・

「もしもし？」

「あ、今どこ？」

「新宿駅w」

「俺仕事終わってこれから帰るとこだから、迎えに行くよ。一人じゃ帰れないでしょw」

「え？でも・・」

「明日も東京で友達と待ち合わせって言ってたよね？」

「ぅん」

「だったら俺の家からのほうが近いから、今日は俺んちに泊まりなよw」

「いいの??」

「ぅんw」

「すぐ着くから、待っててて。」

「ぅん」

正直、今日は涼には会いたくなかった。

優しさはすごくうれしいんだけど・・

昨日優雅と寝て、今日は涼と寝るなんて・・

私最低すぎる。

でも断る理由も見つからない。

明日も東京で友達と会う約束をしてる。友達・・。

神奈川まで戻るより、涼の家に泊まったほうが近いし、待ち合わせの駅までの行き方が分からない私としては涼のところからの方が簡

単に着けるはずだ。
最低だと思いながらも涼に甘えてしまっている。
もっと最低だ。
しかも・・
確かに明日会うのは友達。
だけど・・・
相手を涼が知ったらきっとよくは思わない。
とゆうか、行くなと言うと思う。
そんな友達に会うのに、涼を利用するみたいな感じになってしまって・・
なんかもぅどぉしていいのか分からない。
私の心は罪悪感でいっぱいだ。

いろいろ考えてると、涼から電話。
「着いたよwどこにいる？」
「ん～・・・ここはどこ？？？」
「wwww　何が見える？w」
「えっとね、12番線の案内がある」
「わかったw　待ってw」
「ぅん」
「えーっと、12だよねw階段上がった？」
「上がってない」
「あwいたw」
涼が笑顔でこちらに向かってくる。

第１５話：光らない携帯（後書き）

お久しぶりです。
優璃です。

更新が遅くなってしまい、ごめんなさい。
待っていてくださった方がいらっしゃったら幸いです。

私事ではありますが、６月末に派手に捻挫してしまいまして・・
捻挫でここまでなるのかってくらい足が変色し、気持ち悪かったですw
ようやく完治しましたw

７月はまた私、ものすごーく必死でしたw
なんとかそれも乗り越え、今はパラダイスな毎日を送っております。
とゆうことで、更新もできるだけ早くしていけたらなぁと思っております。

８月です！夏休みですね♪♪
楽しい楽しい夏です♪
今年も暑くなりそうですが、熱中症には十分気をつけて、夏を楽しんでください♪♪
水分はたーくさんとるようにしましょう！！

では、次回もどぅぞよろしくお願いします。

第１６話：大切な友達（前書き）

「」は会話、『』はメールを表しています。

第１６話：大切な友達

「明日はどこの駅に集合なの？」
「浜松町駅」
涼の家に着いてから、涼は私が明日行く駅までの時間を調べてくれてる。

「明日は俺が仕事の前に浜松町駅まで送るから。」
「いいの？」
「うん。一人じゃ行けないでしょｗ」
「・・・ありがと。」
「ｗｗｗ　はいこれｗ」
涼が渡してきた紙には浜松町駅から私の家の最寄り駅までの乗り換えの電車が書いてあった。
そして一番下には浜松町駅から涼の家の最寄り駅までの乗り換えの電車。

「帰れなそうだったらここに帰ってきたらいいよｗ明後日は予定あるの？」
「特にはない・・」
「じゃぁ大丈夫だねｗ」
「ありがと・・」

もぅ言葉が見つからない。
なんでこんなに優しいのだろうか・・
私は・・
あなたを利用していることになるのに・・
どぉしてそんなに幸せそうな顔をするの？・・・

その日の夜は、ただ涼の腕枕で眠るだけで、涼が身体を求めてくることはなかった。

私は罪悪感でいっぱいになりながらも、涼の優しさに甘えてしまっている。
涼がこんなにも親切にしてくれるのは、私が明日会う人が誰かを知らないから。
確かに友達。
大切な友達。
でも涼が知ったら・・
きっと怒るだろうな・・

ごめんね・・
本当は隠し事なんてしないで、誰と会うのか、ちゃんと分かってもらうべきなんだよね。
だけど、ごめん。
涼には話せない。
分かってもらえる自信がない。
ただ悲しませてしまうだけだから。
だから、誰と会うのかは言わない。
傷つけたくないから。
心配かけたくないから。
きっと・・
分かってもらえるほど、信用してもらえるほど、私はあなたに信用されてないから。

でもほんとは・・
自分が責められるのが、疑われるのがこわいだけ。
私はほんとに最低だ。

幸せそうに眠る涼の横で、私は罪悪感と共に眠りに落ちた。

「集合時間より随分早く着いちゃったけど、大丈夫？」
「ぅん。大丈夫。」

集合時間は正午１２時。
到着したのは午前１０時。

涼が仕事の前に浜松町駅まで送ってくれたのだから、仕方ない。
迷って電車間違えて、たどり着けないとかなるよりずっといい。

「この辺にいたら大丈夫かな？」
改札とホームへの階段のちょうど間あたり。

「でもなんで浜松町？」
「んー・・　その子がゴールデンウィークの間こっちに来てたんだけど、今日青森に戻るの。浜松町からバス？だったかな？・・で帰

るから、浜松町で待ち合わせなの。」
「へぇ〜　実家こっちなの？」
「・・ぅぅん　　・・親戚の家？かな？」
「そっかw」

危ない危ない。
実家がこっちで大学が青森なんて、私が知合うはずがないもんね。
高校のときの友達ってゆう設定で・・
涼がそれ以上詳しく聞いてこなかったのが救いだった。
矛盾したことを言っちゃいそうで危ない。

「じゃぁ、俺は仕事だからもう行くけど、一人で大丈夫？？」
「うん。」
「帰るとき一応メールして。」
「ぅん」
「じゃぁまた」

何の疑いもなく、涼は仕事に行った。
でも、ほんとに友達だから。
それ以上でもそれ以下でもない。
ほんとの私を知ってる友達。
仮面を被った、つくった私じゃなくて、私自身でいられる友達。
まるでずっとずっと前からの友達であるかのようで・・
でも知合って半年くらいしか経ってないし、顔も声さえも知らない。
文字だけの関係。
はぃ、そぉです。
知り合った場所は涼と同じ。

文字だけだから、見えるものがあるんだって思う。
文字だから、私も私でいられるんだと思う。

はじめて会うその友達。
こぉいうのは苦手だけど、彼なら大丈夫だって思える。
彼だから、会うの。
友達として。

１０時にここ（浜松町駅の改札とホームの間）に来てから、お手洗い以外ほとんど動いていない。
ずっとここに立っている。
変に動いて迷子とかになったら大変だし。
自分の方向音痴さは自分が一番良く分かっている。

人間観察をしながらいろんなことを考えていると、時間が経つのは意外と早い。待ってる間、メールしてたし。
これから会う友達と。
ただ・・
ずっと握り締めてる携帯に、優雅からの着信が入ることはなく・・・

１０：０６
『電車乗った～。
たぶん１２時までには着くはず！
時間ないからねぐせ直さないできたｗｗｗ』

私が着いたくらいの時間ｗｗ
てかもう少し早く起きればいいのにｗｗ
さすがだなｗｗ
こんな感じでメールが続き・・

１１：５１
『あと１０分くらいで着く。遅くてゴメン～』

約束の時間には間に合ってくれそうだｗ
と思ったけど・・・

１２：０６
『ちょっと待ってて～
空いてるコインロッカー探してるｏｒｚ』

荷物あると大変だもんねｗｗ

１２：３３
『それっぽい人いないけど、どこ？』

顔も知らないのにどぉやって会うんだって話だよねｗｗｗ

てか、それっぽいって、どんなだよｗｗｗ

今いる場所を詳しく伝えると、一人の男の人が近づいてきた。私と同じくらいの歳かな？
「だいき？」
確信なんてないはずなのに、私は見知らぬその人に声をかけた。
「ゆい？ｗｗ」

よかったw
これが大貴かぁw

緊張はしてないw
だって大貴だもん。
もうずっと毎日のようにメールで話してたし、
ほんとにずっと前からの知り合いみたいww

結局会えたのは待ち合わせの時間から４０分くらい経過してからだった。

「わりぃ。コインロッカー空いてなくてさ。他にコインロッカー探してたおっさんが、あっちに空いてたって教えてくれたから、そこまで行ってたw」

メールと全然変わらないww

大貴。
私の大切な友達。
受験のとき、大貴のメールがものすごーく励みになった。
私と同い年で、国立大学の医学部生。

他の人から見たら、私達は普通のカップルにみえるんだろうなぁ～ww

まさか今日はじめて会ったなんて、だれも思わないだろう。
ほんとにメールと変わらないw

あいにくの雨で・・

私は昨日から涼の家にお泊りだから傘なんて持ってなくて。
相合傘までさせてもらっちゃったｗｗ

大貴だから、できるんだと思う。
メールと何にも変わらない、大貴だから。
私が私でいられる唯一の友達だから。

第１６話：大切な友達（後書き）

お久しぶりです。
更新すっかり遅くなってしまってごめんなさい・・
こんな感じでも、毎回読んでくださっている方がいて下さるのが支えです。
ありがとうございます。

さて、今回新たに登場人物が増えました。
お気づきの方もいらっしゃるかもしれませんが、関連小説として執筆中（全く更新しておりませんが・・・）の『ずっとこのままで。』に登場している大貴です。
大貴のことは『ずっとこのままで。』がメインですのでそちらでよろしくお願いします。

少し話が脱線ぎみな感じもしますが、この小説のメインは優雅です。

ほんとにほんとに友達でしかなくても、男の子と女の子が2人で会うのは許しがたいことなのでしょうか・・？
どぅ思いますか？

次話こそは、できるだけ早く・・と思っておりますが・・・気長に待っていてください。。。
毎回毎回投稿がおそくてごめんなさい。

第１７話：非情な私（前書き）

「」は会話、『』はメールな内容を表しています。

第１７話：非情な私

大貴との東京めぐりはものすごーく楽しかった。
東京タワーや六本木ヒルズ。
初めて見るものばっかりで、私はずーっと感動してた。
そんな私に大貴は少しあきれ気味で、だけど楽しそうに笑ってた。

２２時。
私達は居酒屋さんを出て浜松町駅に向かった。
大貴のバスが２２時半。
駅から近い居酒屋さんに入ったから時間には余裕がある。

まさかの大貴も方向音痴で、どぉなることかと思ったけど、なんだかんだで楽しかったｗ

「電車の乗り場、わかる??」
「・・・頑張るｗ」
「ｗｗｗ　まだ時間あるし、そこまで送るよｗｗ」
「ありがとｗ」

さすが大貴ｗ
私は一人ではどこにも行けないな・・

大貴の荷物をコインロッカーから取り出し、ほとんど人通りのない駅構内を歩く。

「ほんとにチリチリうるせぇなｗｗｗ」

「ｗｗｗごめんｗ」

私の携帯についてるストラップの鈴が、静かな駅構内に響く。
でも大貴は心からこの音が煩わしいと思ってるわけじゃない。
表情を見ればわかる。
こんな風に、大貴は小さなことでも会話のネタにできるから、話しやすい。
何話そう・・　って考えなくていいから。

昼間は見かけなかったホームレスの人が、この時間になると端のほうにダンボールで自分の場所を作って寝ている。
東京のほうはホントに多い。
地元の駅にはこんなにいることはない。
だから少しだけ怖くなった。
大貴がいてくれてよかった。
ここを一人で歩くのは怖い。

大貴は電車の改札まで送ってくれて、そこで別れた。
こんな時間まで遊ぶとは思ってなかった。
大貴は夜行バスで青森に帰る。
この時間から家に戻るのはしんどい・・
新宿からはものすごーく混むだろうし・・・

携帯には涼からのメールが届いていた。

『帰るとき連絡して』

もぅ仕事終わったのかな？

とりあえず、返信。

するとすぐに着信が。

涼。

優雅ではない・・

「ゆい？いまどこ？？」

「浜松町駅」

「今日もうちに泊まりな？」

「・・・」

さすがにそれは甘えすぎだ。

帰るのはきついし家までたどり着けるかは不明だけど・・

「もう遅いし、一人では大変でしょ？今日は俺んちに泊まって、明日朝仕事前に新宿まで送るから。」

ぅぅ・・

だけど・・

「今からそっちに行くから。浜松町駅のどこ？」

結局私はまた涼に甘えてしまった・・

涼を待ってる間に大貴にメール。

今日はおごって貰ったし、お礼のメールを。
夜行バスで暇してるんだろうしｗｗ

するとすぐに返信ｗ

『こちらこそありがとｗ
なんだかんだで楽しかったよ～ｗわりと気が合う感じだった気がするｗｗｗ

次は飲みまくろーｗｗ帰らず、ゆいの家に泊まるけどｗｗ
ちゃんと帰れてる？』

『ぅんｗ多分そんな気がするｗ

次は私のおごりねｗ大貴には借りがあるからｗ

泊まるのかｗｗｗ
いつかねーｗｗｗ

昨日泊めてくれた友達の家に今日も泊めてもらうことになったｗ』

『たぶんかｗｗ

泊まらせない系だねｗｗ

良かったじゃんｗ
二日連続で泊まらせてくれるなんてイイ人～。男？ｗｗｗ』

さすがに大貴でもお泊りはだめかなw
私には優雅がいるし。

男ってww
鋭いなw
でもホントに男だと思ってるわけではないんだろうなぁw

そぅしているうちに涼からの着信。
着信があると優雅だって期待しちゃう。
だけどやっぱり優雅ではなくて・・

「もしもし？」
「着いたよwもう少しだから。」
「わかったw」

涼の優しさは心が痛む。

涼と涼のマンションに帰宅。
帰りの電車で今日会ってた友達のことをいろいろ聞かれたけど、なんとかごまかした。

でも嘘は言ってない。
ただ、男の子だとも言ってない。

その日の夜も、涼は身体を求めてくることはなく、深いキスだけを

して幸せそうに眠った。
もちろん私には腕枕。

でもやっぱり優雅の腕枕が恋しい・・・
あれから連絡ないし・・・
仕事忙しいのかな・・・

幸せそうに眠る涼の横で、私は非情にも、優雅のことを考えながら眠りについた。

第17話：非情な私（後書き）

こんにちは。
優璃です。

今回は早めに投稿できました♪
内容は短いですが・・
前回の話のきりが悪かったので、その続きみたいな感じになってしまいました。

優雅・・どぉしちゃったんでしょうね。
あれから連絡ありません。これは普通なんでしょうか？ちょっと心配なゆいです。

大貴、いい友達です。
ゆいのことをほんとによく分かってます。

涼はなんでこんなに優しいのでしょうか・・

今後もどぉぞよろしくお願いします。

第１８話：バイト（前書き）

更新おそくなりました・・・
ごめんなさい。

第18話：バイト

優雅から連絡がないまま9日経った。
不安でしかたない。
でも、自分から電話する勇気がない・・
なんで連絡してくれないのか、考えただけでこわくなる。
もともとあんまり連絡をしない人なのか、私はただ遊ばれていただけなのか。
前者であると信じたいけど、後者のほうが可能性的に高い気がしてしまう。
それとも、私嫌われちゃった？
優雅を最後まで受け入れきれなかったから？
・・・

考え出したら止まらない。
優雅と会った次の日から私の頭では毎日これが繰り返されてる。

だめだ！今日はバイトの面接なんだから！！！

“高田馬場”
たかだばば？？？
苗字2つくっつけたみたいな駅名。
読み方さえも分からなかった。
どぉ読んだら“たかだ”　と“ばば”の間に“の”が入るのか・・
どこ！？って思って調べてみたら、東京のど真ん中w
地方から来た私が知ってるのは新宿とか渋谷とか秋葉原とか・・
やばぃ私たどり着けるのか？？

って思ったのが昨日ｗ

一人だったら絶対無理だｗ
山手線とかｗｗｗ
外回りってなに？ｗｗ
ってかこの間大貴と会ったとき山手線使ったんだっけ？ｗ
私には縁のないものだと勝手に決め付けていたｗ
まさかこっちに来て１ヶ月ちょっとで山手線を使うとはｗ

でも今日はゆーちゃんも一緒だから、心強い。
と言ってもゆーちゃんも地方から来た人だからまだこっちのことよく分かんないはずだけど・・
ゆーちゃんは大学の同じ学科の友達。
同じバイトをしようってなって、今回一緒に応募した。

バイトは塾講師がいいんじゃない？
こっちに来る前におかぁさんに言われた。
親的には、塾講師は安心できるみたい。
安心してもらいたいし、浪人してたわけだし、これまで頑張って勉強してきたことを活かしたかったってゆうのもあって、今回ゆーちゃんと塾講師のバイトに応募した。

なぜだ・・

どぉしてゆーちゃんは事前の準備もなく、そんなに余裕な感じで目的地まで来れるのですか・・・

私の事前の準備も必要なく、高田馬場まで来てしまったw

電話で言われたように歩いていくと・・・１００円ローソン！？

そんなのあるの？？？

はじめてみた！！！

私の地元では見たことないよ？w

って感じで、東京に感動していると目的地に到着。

ゆーちゃんはすごい！

ゆーちゃんがいなかったら私ここまでたどり着けなかったわw

ちょっとドキドキで入ったら・・・

そこは普通の会社って感じのとこで・・

どぉやらここは教育系のアルバイトを紹介している会社のようで、とりあえずここの会社の面接はクリアし、私とゆーちゃんは同じ系列だけど、校舎が違う個別指導塾に採用面接＆採用試験を受けに行くことになった。

校舎が違うのは残念・・

不安・・

だけど仕方ない。

採用面接&採用試験は1週間後。
勉強するっていってもなにしていいかわかんないｗ
今度はその塾の場所を調べなきゃｗ
今度こそ私一人だ・・

面接の帰りに１００円ローソンによって、牛乳が１０５円で買えることに感動ｗｗ
でもさすがに帰るのに1時間以上かかるのに、牛乳買うのはいろんな意味でやめたほうがいい気がして諦めた。
とゆぅことで、１００円ローソンでアイスを買って食べ、池袋に行って人の多さに驚き、無事帰宅。

池袋でよく迷子にならなかったわｗ
ゆーちゃんはやっぱりすごいｗ

ゆーちゃんといる間は東京に感動して、優雅のことを考えることはなかった。

帰宅して携帯をみて寂しくなる。
着信はやっぱりない。

第１８話：バイト（後書き）

お久しぶりです。
優璃です。

およそ1年ぶりくらいでしょうか・・
ほんとに遅くなってしまいました。すみません。
また梅雨の時期ですねw私事ですが、この1年、いろいろなことがありました。
この経験を小説にうまく活かしていけたらと思っております。

こんなにお待たせしてしまったのに、読んでくださっているみなさんに感謝いたします。
今後とも、どぉぞよろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9482g/

あなたを信じて・・・

2011年5月29日08時29分発行